

清末小説から 139

2020.10.1

いくたびかの阿英目録28……樽本照雄 1

『海外拾遺』の原作……沢本香子 4

陳景韓の漢訳プーシキン(下)……荒井由美13

漢訳クレイ『醋鴛鴦』の原作……神田一三22

『一束縁』と日訳『乳姉妹』(誤解の系譜2)……樽本照雄27

談談林译小説口译者毛文钟……王 玉、梁 艳37

清末小説から26、37、39

★漢訳研究関係の文章が集まりました。偶然です。底本未詳の作品はまだ多いですからます罫

清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 8 番4-202 樽本照雄方

いくたびかの阿英目録28

樽 本 照 雄

阿英目録の權威性

林訳シェイクスピアに関連して阿英の「誤解」「思い込み」が後の書物に継続されることを述べる。阿英その人が目録作成の原則から外れることを実行した。当然奇妙に感じる。同時に珍しいと思う。だが阿英の行為には理由があった。目録作成に際しての原則とは何か。書物にあ

る表記をそのまま記述する。誤植があればそれを記録し編者は注を書いて正す。そうしなければ実際の状況がどうなのかわからなくなる。簡単なことだと思えるだろう。ところがやってみるとこれが意外にむづかしい。雑念がわいてきてあるがままを記録できないことがある。

林紓たちはシェイクスピア(莎氏と称する)について「莎士比」と漢訳する。それを今慣用となっている1字多い「莎士比亜」に書き改めて記録すれば事実から離れる。だが書き改めたという意識も生じないらしい。多くの研究者はその細かい部分に気がつかない。

あるいは莎士比を別の人名に置き換えてはもっと逸脱する。本稿はそういう種類の事柄についてのものだ。

阿英の例を示す。林訳『吟辺燕語』である(以下の記述はすでに確認した事実にもとづいている)。

吟辺燕語 英 蘭姆著。林紓 魏易合訳。光

緒三十年(一九〇四) 商務印書館印。124頁

「蘭姆(ラム)」と明確に書かれているところにご注目いただきたい。ここが重要点だ。

ラム Lamb 姉弟がシェイクスピア原作の戯曲(莎劇と称する)を小説化した。それが『シェイクスピア物語 Tales from Shakespeare』(あるいは『シェイクスピア戯曲物語』)だ。それを林紓たちが漢訳して『英国詩人吟辺燕語』(一般に『吟辺燕語』と称する)である。

「英国詩人」がシェイクスピアだ。「吟辺」が戯曲、「燕語」が物語に相当する。『シェイクスピア戯曲物語』となる。林紓たちはラム本の原題をそのまま漢訳していることがわかる。林紓らはラム本にもとづいて漢訳した。ゆえに小説のままだ。なんの不思議もない。阿英目録にあるとおりの「蘭姆著」であればあまりに常識的である。どこから見ても問題になるようなものではない。どうして誤りなのかとかえって不思議に思う。

ところがこの阿英目録の記述は一般の文学史における説明とは大きく乖離している。両者はまったく違うといっている。

私は大学の授業で林紓が莎劇を小説に変えて翻訳したと習った。林紓が批判される理由だ。林紓は戯曲と小説の区別がつかないと漫罵されたという。また外国語を理解しない林紓が英語、フランス語、ロシア語、ドイツ語、スペイン語などの原作を翻訳するとはどういうことだ。嘲笑の語調で講義されたことをそれから半世紀後の今でも覚えている。古い話で申し訳ない。そういう説明だった印象はその後も長くつづいた。どうしようもない林訳である。それが中国で大人気だった。おかしいことがあるものだ。私は何も知らない学生だったから頭から信じた。

しかし阿英目録を見れば違うことが書いてあるではないか。林訳『吟辺燕語』は蘭姆(ラム)原著とする。すると奇妙なことになる。

私が感じるその奇妙さを説明しようとするれば

同じ場所を行ったりきたりせざるをえない。あまりにも長期間(40年近く)にわたって疑問のようなそうでないような不安定な状態にあった。違和感があり続けたといいなおしても同じだ。説明が重複してしまうのをお許しいただきたい。

前述のとおりラム本はもともと莎劇を小説に書き換えたものだ。林紓らがラム本を漢訳すれば小説になるのは当然だろう。どうしてもここにもどってくる。だが「戯曲を小説にかえて翻訳した」「戯曲と小説の区別がつかない」というのが従来の一般的な林訳批判だ。それと阿英目録は根本から違うではないか。阿英目録の該当記述は私が受けた授業内容とは明らかに異なる。どうもおかしい。しかし奇妙に感じる理由を説明はできないのだった。

その後いくつかの中国現代文学史を読んだ。しかし林紓は「戯曲を小説にかえて翻訳した」としか説明されていない。日本語、英語で書かれた文章も同じだ。林紓が文芸の分野分類に無知であったという説明一辺倒である。世界中の研究者が説明して例外がない。驚きだと今だから言える。しかし当時は微妙な違和感に包まれていただけ。自分の知識が少ないから理解できないのだろうとしか感じなかった。

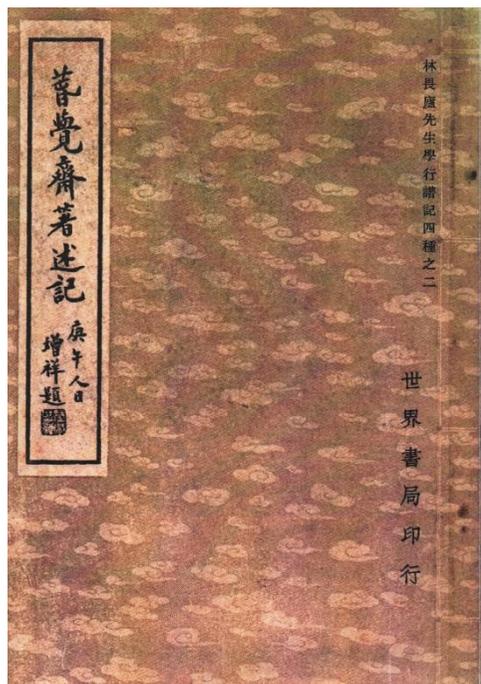
阿英は清末小説の実物を所蔵して目録を作成した。ゆえに蘭姆と記された1911年以前(正確には1904年)の林訳本を手元においているはずだ。それを探索するのは1970年代、80年代の日本では不可能だった。

林訳批判と阿英目録の記述が一致しないままだ。しかもそこを説明する研究者は皆無である。だから不安定な状態だといっている。

つぎにいくつかの文献を紹介する。

朱義胄のばあい

朱義胄『春覚齋著述記』(上海・世界書局1930、影印本)は林紓の弟子による著述目録だ。『吟辺燕語』の説明がまた不思議なことになっている。



影印本

英国詩人吟辺燕語一卷 Tales from Shakespeare

英国莎士比亞 W. Shakespeare 原著. 先生与魏易同訳. 於光緒三十年十月. 初由商務[印書]館印行. 或曰原書為卻而司蘭 Charles Lamb 所著. 題莎士比亞者. 誤也. 未究其詳. 姑竝識之. 32頁

漢訳の原題を英文で明記している。これは莎氏原著、ラム姉弟改編の『シェイクスピア物語』を意味する。ところがそれを説明して「あるいは原書はチャールズ・ラムの著作ともいう。莎士比亞と題するのは誤り。その詳細は不明。しばらく記録しておく」とする。

ひとつは林訳が「莎士比」としているのを「莎士比亞」と誤記した。ふたつは原作をラム本とするのだからそれについて疑問符をつけるのはおかしい。

朱義胄は莎氏、ラム、『シェイクスピア物語』という基本単語をならべてはいるがその関係をうまく説明できていない。問題を未解決のままにして放り出した。

文学革命派による林紘批判

林訳批判のおおよそをかいつまんで述べる。

莎氏原作、ラム改編とあれば問題にはならなかった。普通はそう考える。林訳にはそのラム名がない。そこを文学革命派はつかんで林訳批判を作り出した。表面的にはそういう流れだ。いかにも偶然のように林訳批判が生まれた。

だが事実は異なる。文学革命派は最初から林紘を攻撃目標にした。彼らには自分たちを圧倒する巨大で強力な敵が必要だった。なぜなら誰も相手にしてくれなかったからだ。孤独を噛みしめているだけでは事態は進まない。その敵として林紘を指名したのが真相だ。ラム名があったらあつたで別の箇所をさがして論難の理由にするだろう。攻撃するための箇所を別に見つけることはできる。

朱義胄の説明は五四直前の1918年に文学革命派が林紘批判をくりひろげた影響を直接に受けているといえる。

錢玄同、劉半農、胡適ら北京大学の教授たちが口を揃えて林紘が「戯曲を小説にかえて翻訳した」と非難したのだ。くり返すが『吟辺燕語』の著者を「莎士比」と書いている箇所を握って攻撃の根拠とした。彼らは原作がラム本であることは百も承知している。ラム本と知ったうえでそれにはまったく言及しない。無視をした。あくまでも林紘が莎劇そのものから直接小説に改変したと糾弾し続けたのだった。そのためにはラムの名前が出てきては不都合だ。ラムを隠蔽した。

林紘が「序」で説明した語句を見てほしい。「莎氏之詩」は莎劇を意味する。莎氏の書いた戯劇は詩そのものなのだ。林紘はそれを知っている。「莎士比筆記」「莎詩之紀(記)事」はラムの『シェイクスピア物語』を指す。林紘は戯曲と小説の区別をしている。

林紘は戯曲と小説の区別がつかない。これをいうために錢玄同と劉半農は林「序」の存在を

黙殺した。

追隨した胡適は「林琴南はシェイクスピアの戯曲を記述体の古文に翻訳した！これは本当にシェイクスピアにとっての大罪人だ〔林琴南把 Shakespear 的戯曲、翻成了記叙体の古文！這真是 Shakespear 的大罪人〕」（「建設的文学革命論」『新青年』第4巻第4号1918.4.15）とまで書いた。胡適は莎氏の原文を Shakespear と綴っている。誤りではない。アメリカ留学帰りの胡適が間違はずがない。この綴りはラム本で使用された。胡適もラム本を所有していたのだ。馬脚をあらわしてまで林紓批判にどうしても参加したかったらしい。

朱義胄はまさか北京大学の教授たちが嘘をついているとは思えない。こう書いている私もその真相に気づくまでは長く疑問に感じていただけだ。

朱義胄は英国莎士比亞原著として以下の作品も掲げる。「雷差得紀」(1916)「亨利第四紀」(1916)「亨利第六遺事」(1916)「凱徹遺事」(1916)。ただし「亨利第五紀」(1925)は未見扱いで「亨利第六遺事」の項目に補足する(20頁)。以上の作品は小説体で漢訳されている。これらについて朱義胄の説明はない。

朱義胄は『吟辺燕語』の原作がラム本であることを知っている。同時に林紓批判が巻き起こったことも承知だ。林紓らがその漢訳に莎士比亞とだけ表示したことに戸惑った。師匠の林紓が莎士比亞と書いた真意が理解できず判断を下すことができない。師匠の思考を把握できないから擁護する論理を展開することに失敗した。それが判断停止の説明に終わった理由だ。

疑問は「英国莎士比亞[亜]原著」としている箇所にある。阿英が自分の目録に蘭姆としていたのと記述が異なる。どうしてもそこに回帰する。林紓の実物の表記はどうなっているのか。莎士比亞か蘭姆か。実物には莎士比亞とあって朱義胄の説明がラムなのかもしれない。 罫

『海外拾遺』の原作

沢本香子

本稿で取り上げる原作者不明『海外拾遺』についてその不可思議さを理解してもらうのは少しむづかしい。なにしろ昨日今日の問題ではない。阿英目録の1950年代から謎が発生している。謎であるということすら認識されていない。

阿英がドイル原作だと記述した。それを引用し続けているのが実情だ。そこに謎が存在していることに気づいた。2019年によく解決をみた。どれだけの時間が経過したものか。気も遠くなる。

とりあえず手元にある書籍の書誌的な説明からはじめる。

『海外拾遺』のあるがまま

筆者が見ているのは次の再版本(影印)だ。

海外拾遺 (筆記小説)

商務印書館 発行兼著作人

上海・商務印書館 戊申七月十六日(1908.8.12) 初版/中華民国四年十月十九日再版
説部叢書二集第七十二編

収録作品は以下のとおり。「青龍館(全11章)」、「修徽人」、「西飛燕」、「園丁」、「老画師」、「提琴客」、「聖画」、「妻母遺囑」

分 售 處	總 發 行 所	印 刷 所	印 刷 人	右 代 表 人	著 者 作 行 人 衆
上海商務印書館	上海商務印書館	上海商務印書館	上海商務印書館	上海商務印書館	上海商務印書館

此書有著作權印必究



1908年初版については後で述べる。該書は1915年に再版されたとき商務版「説部叢書」2集の表示がなされた。以上のように全8作品を収録する。

全116頁のうち「青龍館」だけで45頁(全体の約4割近く)を占める。あとの7作は短篇だ。すなわち『海外拾遺』と題した短篇小説集である。

再版本奥付には初版と再版の刊年をそれぞれ記している。初版で確認できないばあい取り扱いは慎重であるべきだ。

単純な理由である。再版に記載された初版の時間表記が誤っている例を見た。商務印書館は奥付記載の管理が厳格ではない。平気で誤記する。

つまり初版だという「七月十六日」がそのまま初版に記載されているという保証はない。そこには目録作成者がややもすれば陥る穴がある。

初版では「七月」までの表示だろうと思う。当時、商務印書館が出版する単行本の刊年表示は月止まりが普通だった。ただし例外はあるだろう。だから初版を見るまでは確定することができない。

「発行兼著作人：商務印書館」とだけ記される。「著作人」が商務印書館というのは翻訳者という意味のようでもある。こういう場合は商務印書館が原稿を買い取ったものだ。それが中村忠行の説明だった。そうかもしれない。そうになると翻訳者の探索はほぼ不可能だ。

結局のところ再版本には本文にも原作者、訳者の名前は記述されていないのが事実である。原作、原作者不明ということに普通はなる。

ところが阿英目録には別のことが書いてある。該作の原作者はコナン・ドイルだという。

阿英目録からはじまる——その権威性

清末翻訳小説について調べるばあい阿英編「晚清小説目」(『晚清戯曲小説目』上海文藝聯合出版社1954.8/増補版 古典文学出版社1957.9/北京・中華書局1959.5)を見る。以前はそれしかなかった。まず検索したものだ。1988年に『清末民初小説目録』が刊行されてから状況は変化しただろうか。そうは見えない。それも当然だ。『清末民初小説目録』そのものが部分的に阿英目録を下敷きにして成立している。阿英の権威は衰えていないのだ。論文を具体的に見ればすぐに判明する。

『海外拾遺』について阿英目録から示す。

[阿英137] 海外拾遺 英 科南達爾著。光緒三十四年(一九〇八) 商務印書館訳印。

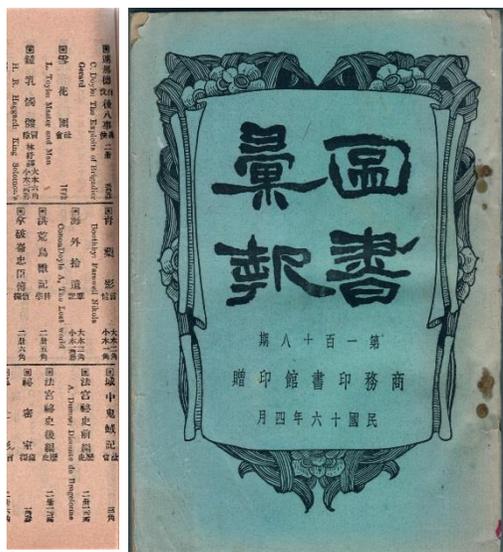
収録作品の題名までは明らかにしていない。阿英目録ではドイルのホームズものに明細を記した作品がある([阿英158]『福爾摩斯再生案』)。同じドイル作ならばこちらも収録作品名を挙げるべきだろう。阿英の記述方針が一定していないことになる。

注目すべきは科南達爾(コナン・ドイル)著だと明記していることだ。最初はここを見たときなるほどドイルの作品なのかと納得していた。のちにドイルの作品に『海外拾遺』に該当するものはないように思った。ただし多数の作品を残したドイルだからもしかしたら筆者が見逃しているかもしれない。作品名が明示されていないのだ。調べようがない。その頃はそう考えもした。

阿英はなににもとづいてドイル著としたのか。

その根拠はあるだろう。推測はつく。

可能性が高いのは商務印書館が刊行した自社の販売書目だ。『図書彙報』第118号(商務印書館1927.4)「説部叢書」の部に『海外拾遺』が収録されている。その原作を記述して Conon Doyle A, The Lost World だ。



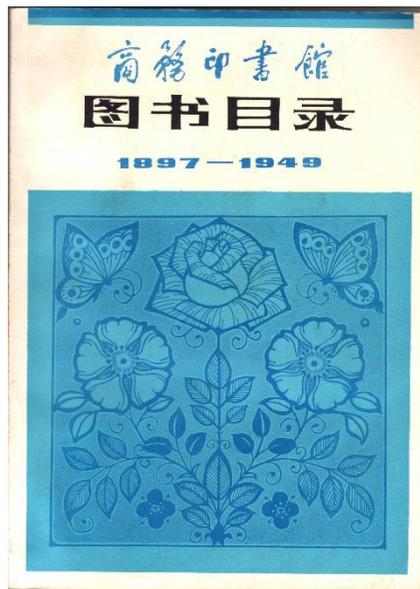
中段に見える

表紙

綴りに間違いがある。また姓名の分離がなされていらない。学術資料ではなく出版社の宣伝を兼ねた販売目録だから厳密さを求めてもしたかがないだろう。

ドイル『失われた世界 The Lost World』と書いてある。奇妙なことになる。なぜなら『失われた世界』であれば『海外拾遺』の内容とは別物だからだ。なんと言っても決定的なのは刊年である。ドイル『失われた世界』は1912年に刊行された。ところが『海外拾遺』は1908年で先行する。漢訳のほうが原作公表より早く出版されることはありえない。ドイル原作ではないことの証拠である。

以前に刊行した自社書目の内容を検討することなくそのまま複写したのが『商務印書館図書目録(1897-1949)』(北京・商務印書館1981)だ。こちらは保存用の資料なのだから厳密に調査する必要があったのではないか。注釈すらつ



けていない。資料についての扱いが無頓着すぎる。

[商目95] 海外拾遺(筆記)……本館訳/
A. Conon Doyle: The Lost World

部分的に訂正したが基本的に誤ったままだ。先行目録を複写しただけだから刊年も不記である。やはり注記は必要だろう。それが無い。該作品の版元がそう記録した。こちらも研究者に与える影響は小さくない。

阿英目録にもどる。商務版「説部叢書」の『海外拾遺』を実際に見てそこには原作者の名前がないことを知った。それでも自分の見た書物にたまたま記されていないだけで阿英の所有する版には記載されているのかもしれない。長らく不安定なままで過ごした。

だがドイルと記述する版本にどうしても出会わない。ようやく奇妙だと気づいた。書物に原作者が明記されていないのであれば目録には「原作者不記」と記述すべきだ。くり返すがドイル『失われた世界』は漢訳『海外拾遺』とは完全に別物なのだ。不可解さの度合いが上昇する。

いくつかの研究——阿英目録の引用

阿英目録以降の研究、目録はほとんど例外なく原作者はドイルだと記述する。

陳大康『中国近代小説編年』(上海・華東師範大学出版社2002.12)から該当部分を示す。

[編年217](光緒三十四年七月)十六日((1908)8月12日) 商務印書館出版《海外拾遺》, 標“筆記小説”, 署“(英)科南達爾著”, 商務印書館訳”。

陳大康から引用したのはコナン・ドイルの署名があるように記述しているからだ。阿英目録はそれほどまでに信頼されている。しかも陳大康は後の編著では別のことを書く。その変化が興味深い(後述)。

ある研究者はそれを信じた。『海外拾遺』が「コナン・ドイルのあの『失われた世界』である[柯南道爾的那部《失落的世界》」([張治1709])と説明して疑うところがない。

先行文献がそう指摘しているから無視することもできない。張治論文を根拠にして説明したのは付建舟『商務印書館《説部叢書》叙録』(北京・中国社会科学出版社2019.8)だ。「原著者為英国柯南・道爾,《海外拾遺》為《失落的世界》(The Lost World, 1912年)」(209頁)とする(後述)。

ご注意ください。阿英目録の誤りまたは先行文献を引用紹介しただけの研究者たちを筆者は批判しているのではない。阿英目録の権威が現在も持続していることの証拠だと思うだけだ。

本稿では『海外拾遺』の原作を探究する。

ひとつの手がかり——新聞広告

『海外拾遺』の著者をコナン・ドイルとしない文献がいくつかある。数の上では複数だが内容はほぼ同一だ。21世紀になって過去の資料から取り出されてきた。新聞広告である。

新聞広告について中国では以前と現在では扱いに変化が生じている。説明する。

きっかけは刊年を記載しなくなった『繡像小説』である。書かれていない発行年月を推測するために新聞広告を資料に使用したことがある。1980年代の話だ。それに対して張純は広告を使用すべきではないと強く反対した。広告は広告だ。売るための文章だから嘘が多い。内容に問題がある。つまり広告自体の信頼性が低い。張純を含めて一般にそう考えられていた。だから研究では無視するのが当然だったのだ。

具体例をあげる。雑誌に掲載された広告のばあいだ。これも1980年代に清末の小説専門雑誌が影印本で複数種類刊行された。『新小説』『繡像小説』など貴重な雑誌を読むことができる。画期的な出版物だと筆者は高く評価する。ただし広告部分をすべて削除した。これは日本から見れば信じられないくらいの無見識である。学術的資料的な価値が半減するといってもいい。編集担当者は広告を排除することが当然だと考えていたと思われる。

以前においてはそれくらい広告についての認識はお粗末だった。だから新聞広告が刊行物の刊年を推測する資料となるという発想そのものを持たなかった。

資料提供者は自分の勝手な判断を行使すべきではない。全部を提供する。利用者のほうで内容を選別すればいいだけのことだ。そういう常識が通じなかった。

昔は新聞そのものを見るのが困難だった。だが新聞を資料として利用できるようになった研究環境の変化がある。これを見逃すわけにはいかない。また思考の転換も生じた。広告が書物の刊行を把握するための根拠に使用できる。そう外部から言われてようやく気づいたらしい。あの「文化大革命」以降であると強調しておく。

新聞広告について見識をもった研究者の論文から引用する。資料的価値がある広告だから以下にそのまま示す。発行順に掲げる。資料には

通し番号を振る。

陳大康「晚清『新聞報』と小説相関編年(1908-1911)」(『明清小説研究』2008年第3期(総第89期)2008発行月日不記。162頁)が最初だ。広告原文には句読点、記号はついていないはずだ。引用文の記号は陳大康が施したと思う(以下同じ)。

- 1 『新聞報』宣統元年己酉正月初四日(1909.1.25)商務印書館広告
「《海外拾遺》, 標“筆記小説”, 三角:
“英国畢脫利士哈拉丁著。大都叙述彼国之高人韻士、隱逸名流等遺事, 内分七則, 曰青龍館, 曰修口人, 曰西飛燕, 曰園丁, 曰老画師, 曰聖画, 曰妻母遺囑。洋洋四五万言, 奇情逸致, 意趣横生。”(注:「提琴客」なし)

収録作品数を「七則」というのは事実を反映していない。実際は8作だからだ。ただしこれには意味がある(後述)。

この新聞広告で注目されるのは著者を「英国畢脫利士哈拉丁」としている箇所だ。阿英目録とは異なる。また再版にはない原作者だ。どこから取り出したのか不明。初版にあるのだろうか。あるとすれば目録類になぜ記載されていないのか。理由がわからない。もうひとつは「説部叢書」に言及していない。単なる翻訳小説の1種としての扱いだ。

のちに陳大康は複数の新聞広告を精査して『中国近代小説編年史』全6冊(北京・人民文学出版社2014.1)にまとめた。上記の『新聞報』よりも少しさかのぼる『神州日報』を見つけた。

- 2 【編年④1670】『神州日報』光緒三十四年十二月二十一日(1909.1.12)商務印書館広告
「筆記小説《海外拾遺》三角: 英国畢脫利士哈拉丁著。大都叙述彼国之高人韻士、隱

逸名流等遺事, 内分七則, 曰《青龍館》, 曰《修囑人》, 曰《西飛燕》, 曰《園丁》, 曰《老画師》, 曰《聖画》, 曰《妻母遺(囑)》。洋洋四五万言, 奇批(情)逸致, 意趣横生。」(注:「提琴客」なし)

収録作品数を間違えているところも『新聞報』と同じだ。ここにも「英国畢脫利士哈拉丁」とある。

以上の新聞広告を収録した上で陳大康は単行本について次のように説明した。

- 3 【編年④1576】同日(注: 光緒三十四年七月十六日(1908.8.12)), 上海商務印書館出版《海外拾遺》, 標“筆記小説”, 署“原著者: 英国畢脫利士哈拉丁; 訳述著: 商務印書館編訳所”。此為《説部叢書》二集第七十二編。書共収九篇: 青龍館(含十一章)、修傘人、死者茂拉斯喀羅喀、西飛燕、園丁、老画師、提琴客、聖画、妻母遺囑。

前出陳大康『中国近代小説編年』が著者をコナン・ドイルにしていたのとは大きく異なっていることがわかるだろう。「原著者: 英国畢脫利士哈拉丁」というのが新しい説明だ。以前は明記していたドイルをなぜ引つ込めたのかは説明していない。

陳大康の記述は興味深い。それと同時に疑問も生じる。

ひとつは発行年月日を「光緒三十四年七月十六日」としているところだ。本稿冒頭で示した後の「説部叢書」本に記された初版刊行年はまさにそうになっている。だが初版に「十六日」まで記しているとは思わない。再版において初版の刊年を記述するばあい新しく日にちを追加する例が「説部叢書」本に見えるからだ。奥付の刊年が各版ですべて一致しているとは限らないことを知るべきだ。初版はせいぜい「光緒三十

四年七月」までだろう。陳大康が提示しているのが本当に初版であるのか疑わしい。確認する必要が生じる。

陳大康の記述にはいくつかの誤記がある。

「死者茂拉斯喀羅喀」は作品名ではない。作品途中に出てくる語句(人名)だ。それを見誤ったから収録作品が「九篇」あると誤解した。

「説部叢書二集第七十二編」は誤りだ。なぜ間違いかその理由をのべる。重要だがほとんど知られていないことだ。何度でも繰り返し説明する。

商務版「説部叢書」については基本で把握すべきことがある。まず元版がある。それが後に初集と呼ばれるようになった。この変化を見逃す研究者が多い。最初から初集があったかのように考えている。

元版は第一集から第十集までである。各集10編の全100編で構成される。中華民国になって既刊の全100編は初集と改称した。この区別がつかないと基本的な部分で理解がつかず。初集につづいて2集(第2集ではない)、第3集、第4集まで刊行される。

ゆえに2集と称する書物が陳大康の『中国近代小説編年史』つまり清末までを収録範囲にした年表に出てくることはありえない。あつてはならない事柄なのだ。出せば区別がつかないことを自ら認めることになる。陳大康はそれを出した。

では1908年の『海外拾遺』とはなにか。「説部叢書」元版に収容されなかった単独の翻訳小説である。

資料をひとつ示す。

「商務印書館出版図書総目録」(『東方雑誌』第8巻第1号広告 1911.3.25)がある。中華民国以前の刊行であることにご注目願いたい。ここにある「説部叢書」は元版である。のちの初集ではない。その細目を掲載しているのが珍しい。それとは別に「筆記／小説 海外拾遺三角」(32頁)と掲げられる。これは「各種小

説」の1種だ。

なにが重要かといえば該作品は1911年の時点で「説部叢書」元版には収録されていない証拠となる。翻訳小説の1種として独立して刊行されたにすぎない。それが民国後の1915年になって「説部叢書」2集に吸収編成された。商務印書館編訳所の編集方針が変更になったのだ。

「説部叢書」元版全100編(種類でいえば全102種)で終了させなかった。刊行を継続して2集100編、第3集100編、第4集へと継続させることにした。以前に出版した翻訳小説に集編番号を付与したという流れである。

1908年当時は存在しなかった「説部叢書二集第七十二編」だ。それをあるかのように説明したのは間違いである。そう指摘された陳大康はどうしたか。

陳大康『中国近代小説史論』(北京・人民文学出版社2018.3)は『中国近代小説編年史』を再編集した目録を附録として収容した。新聞、雑誌、翻訳小説に分けたのが新しい工夫だ。ただし単行本の創作小説を排除した。再編集ものであるうえに創作単行本のない目録を誰が使うのだろうか。陳大康の意図を理解するのはむづかしい。

その「附録三 近代翻訳小説資料長編」に次のように記述する。

4 [大康18-901] ((光緒三十四1908年七月)十六日(8.12)) 上海商務印書館出版《海外拾遺》, 標“筆記小説”, 署“原著者: 英国畢脱利士哈拉丁; 訳述著: 商務印書館編訳所”。

発行の日付「十六日」と原著者名をくり返している。作品明細は省いた。間違いだと指摘された「説部叢書二集第七十二編」は削除して知らぬ顔をした。

ただの偶然だという人もいるかもしれない。しかし誤りだと書かれた「説部叢書」のほとんどす

べてを説明もせず削除するのが偶然だろうか。見識のある研究者がやることも思われぬ。

陳大康の説明で注目を引くのは「署“原著者：英国畢脱利士哈拉丁；訳述著：商務印書館編訳所”」という部分だ。著者を畢脱利士哈拉丁として新聞広告と同一である。

前後するがつぎは付建舟『清末民初小説版本経眼録三集』（北京・中国社会科学出版社2013.8）だ。経眼録シリーズは実物の写真を掲げていて信頼性の高いことを示す。

気がついたが付建舟が192頁に掲げる「説部叢書」本の書影は市販されている影印本そのものに見える。あるいは付建舟が確認した版本を底本として影印本が製作されたか。詳細は知らない。以下のとおり（筆者が説明を加えた）。

5 [付三192] 表紙奥付写真あり。作者不詳。細目あり。異なるのは「修囑人」。戊申七月十六日初版発行／中華民國四年十月十九日再版発行、説部叢書二集第七十二編。説明して広告に「英国畢脱利士哈拉丁著。大都叙述彼国之高人韻士、隱逸名流等遺事，内分七則，曰青龍館，曰修囑人，曰西飛燕，曰園丁，曰老画師，曰聖画，曰妻母遺囑。洋洋四五万言，奇情逸致，意趣横生」（193頁）とある。注：提琴客なし。

広告について掲載紙と刊年の説明はない。先行論文を参考にしたのだと思う。

ネットの蔵書目録など

本稿を書いている途中で意外なものを見つけた。ネットで検索すると上海図書館所蔵本の『海外拾遺』が出てきた。それも2種類ある。そのうちの1冊に「原著者 英国畢脱利士哈拉丁，商務印書館／商務印書館印行 光緒三十四年七月[1908.7]発行」と登録されている。旧暦の七月を新暦表記の「1908.7」と不正確に置き換えるのは阿英目録以来からある中国学界の伝統だ。

目を引くのは「著者畢脱利士哈拉西」と記述する箇所である。新聞広告に見える畢脱利士哈拉丁とは末尾の1字が異なる。もしかすると上海図書館の誤登録かもしれない。

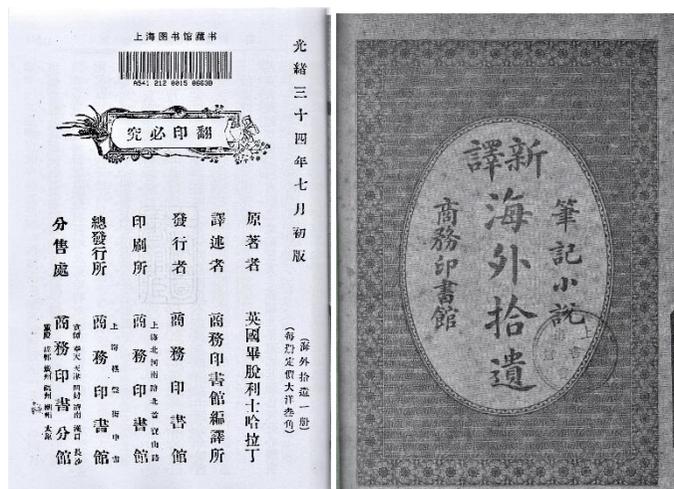
ここからわかることは該書初版には著者名が明記されていることだ。これには驚いた。

なぜ驚くのか。簡単なことだ。初版に著者名が記載されていたのであれば阿英はなぜそう記録しなかったのか。阿英は実物を手元に置いて目録を作成したことで有名なのだ。またどうして関係のない科南達爾（ドイル）を挿入する誤りを犯したのか。ふたつの方面でわけがわからない。

それはさておき初版には著者が明記されていた。この事実は原作を探索する際に重要な手がかりを与えてくれる。

上海図書館所蔵本を見る

いま『海外拾遺』の複写を手元において見ている。



上海図書館所蔵

これは興味深い。

表紙は右から「筆記小説／新訳 海外拾遺／商務印書館」とある。奥付は「原著者 英国畢脱利士哈拉丁」「訳述者 商務印書館編訳所」「光緒三十四年七月初版」である。

上海図書館の図書目録が「著者畢脱利士哈拉西」と記したのはやはり誤植だった。広告と同じく畢脱利士哈拉丁でなければならない。

そうして前述付建舟『商務印書館《説部叢書》叙録』が出た。重要なのは初版の表紙と奥付写真を掲載している点だ(208頁)。

興味を感じているから関連する書籍にめぐり合うということもあるだろう。初版と再版という基本資料は揃った。

以上をまとめると原作者は「英国畢脱利士哈拉丁」である。

当然さらなる疑問が出てくる。なぜ後の「説部叢書」本には原作者の漢訳名を記述しなかったのか。商務印書館編訳所の編集者同士、もしくは担当者と新聞広告を出稿した部署または人物が違うのかもしれない。内部で連絡がついていないのであれば自社出版目録にドイルなどと違うことを示すのも不思議ではなくなる。相互の意思疎通が成立していない。後の編集部もそれを継承しているらしい。この不明部分はたぶん解明できないだろう。

「英国畢脱利士哈拉丁」と阿英目録のコナン・ドイルのふたつが示されている。しかし前述のとおりドイル『失われた世界』は『海外拾遺』とは内容が一致しない。必然的に片方の畢脱利士哈拉丁を手がかりとして探索することになる。そうしなければならない。

畢脱利士哈拉丁を追求する

外国人の姓名が漢訳されたのを見るばあい普通は原文の順序のままだと思う。欧米(ハンガリーを除く)であれば名・姓の順だ。

コナン・ドイル Conan Doyle であれば科南達爾、柯南達利などとなる。これは漢訳の一部であって実際の表記にはもっと多種が見られる。

ところがそうでないものもあるにはある。たとえば William Chalmers Burns であれば姓を先に置いて賓維廉、賓為霖だ。Fergus Hume なら歇福克、許復克だし Tom Gallon は加倫湯

姆である。有名なところで William Le Queux は葛威廉、葛維廉などとなる。

その順序が入れ替わっていただろうか。正解に到達するまで試行錯誤するほかない。

畢脱利士哈拉丁を区切る。畢脱利士と哈拉丁だろうと推量する。見つからなければやり直すだけだ。

畢脱利士には Patrice、Petrice などを当ててみる。畢はBになる可能性もあるだろう。

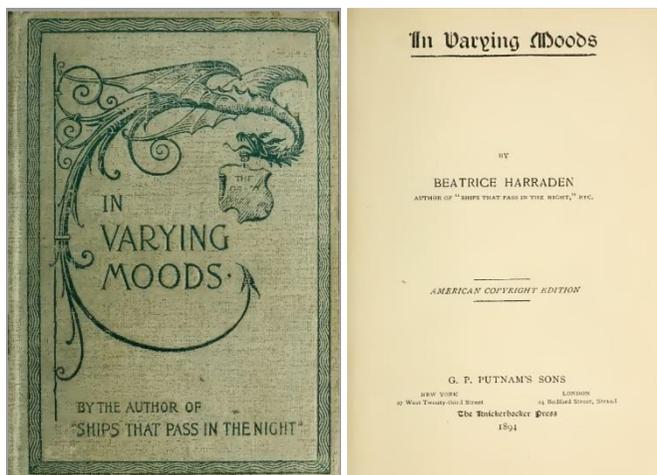
哈拉丁はむつかしい。Harodim、Haladin、Haradin、Haridon、Harding などいくつも候補がでてくる。

ということで見つけたのがベアトリス・ハラデン(Beatrice Harraden、1864-1936)である。わかってみれば Beatrice が畢脱利士だ。Harraden が哈拉丁と重なる。

ハラデンはハーレードンとも日本語では表記されることがあるらしい。本稿ではハラデンを使う。

ハラデンはイギリスの作家、婦人参政権運動家だ。女性社会政治同盟(Women's Social and Political Union (WSPU))の創設者のひとりとしても知られる。

いくつかの作品をみて『海外拾遺』の原作としてネットで探し当てたのは『さまざまな気分で IN VARYING MOODS.』(1894)だ。



ネットから引用



Miss Beatrice Harraden
Miss Beatrice Harraden



園丁 原作不明

老画師 AN IDYLL OF LONDON. / 別版の題名：
AN IDYLL OF LONDON.

提琴客 CONCERNING THE CLOCKMAKER
AND HIS WIFE.

聖画 THE PAINTER AND HIS PICTURE.

妻母遺囑 原作不明

SORROW AND JOY. 未訳未収録

「園丁 [庭師]」と「妻母遺囑 [義母の遺言]」の2篇は「IN VARYING MOODS.」に収録されていない。またそこに存在する「SORROW AND JOY.」は漢訳されなかった。つまり英文原作は7篇を収録する。漢訳に際し1篇をはずしその上で別のところから2篇を挿入した。移入した2篇がハラデン原作かどうか不明。合計8篇とするのが漢訳『海外拾遺』だ。

ほかに「THE UMBRELLA-MENDER.」

(NEW YORK: OGILVIE PUBLISHING COMPANY. 刊年不記) また「SHIPS THAT PASS IN THE NIGHT.」(BOSTON: CHARLES E. BROWN & CO. 1893) なども見た。筆者の力不足で2作の漢訳作品に該当する原作を見つけることはできなかった。ご教示いただけるとうれしい。

残る謎

ハラデン原作は7篇であって漢訳の8篇とは異なる。興味を感じるのは原作の篇数が新聞広告の「七篇」と一致するところだ。つまり商務印書館編訳所の広告出稿担当者は『海外拾遺』の原作を知っていた。原作が7篇で構成されているのに基づいて広告文を書いた。だから漢訳が8篇あるにもかかわらず7篇だと紹介したのである。のちの目録作成者はそれを無視してコナン・ドイル作だといひ加減な注釈をつけた。それを阿英は継承したようだ。

おおよその真相が判明した。いくつかの謎が残る。

『海外拾遺』の原作

『海外拾遺』の原作は BEATRICE HARRADEN “IN VARYING MOODS.” (NEW YORK, LONDON: G. P. PUTNAM'S SONS, 1894) である。

内容の似たような書物がある。

シカゴ版 “A BIRD OF PASSAGE AND OTHER STORIES.” (CHICAGO: DONOHUE, HENNEBERRY & CO, 刊年不記 (1894)) の収録は2作品のみ。“AT THE GREEN DRAGON.” と “AN IDYLL OF LONDON.” だ。

またニューヨーク版 “AT THE GREEN DRAGON.” (NEW YORK: OPTIMUS PRINTING COMPANY, 1894) も同様。“AT THE GREEN DRAGON.” だが “AN IDYLL OF LONDON.” となっていて単語が異なる。

ということで7作を収録した『さまざまな気分で IN VARYING MOODS.』が『海外拾遺』とほぼ一致する。漢訳題名と原題を併記する。以下のとおり。

青龍館 (11章) AT THE GREEN DRAGON. : AN EPISODE—

修繕人 THE UMBRELLA-MENDER. : A STUDY
西飛燕 THE BIRD ON ITS JOURNEY. / 別版の
題名 : A BIRD OF PASSAGE.

- 1 阿英目録は初版にない科南達爾(コナン・ドイル)をなぜ記述したのか。
- 2 商務印書館はどこからコナン・ドイル『失われた世界』を持ってきたのか。ただの勘違いなのだろうか。
- 3 『海外拾遺』1908年刊行とドイル『失われた世界』1912年刊行の基本的矛盾に研究者たちはなぜ気づかなかったのか。
- 4 新聞広告を出稿した編訳所の担当者は原作と原作者ハラデンを知っていた。それで正しいのか。
- 5 初版の原作者名は「説部叢書」2集になぜ反映されなかったのか。初版にあって再版にないのは奇妙だ。
- 6 のちの『商務印書館図書目録(1897-1949)』はコナン・ドイル『失われた世界』となぜ誤ったままにしたのか。

謎は謎のままに終わる気がする。どのみち些細なことだ。以上の謎を見るにつけ阿英目録の存在が巨大なものであることを強烈に感じざるをえない。研究者は阿英の呪縛から逃れることができないのだ。

『海外拾遺』の原作をほぼ明らかにすることができたことを確認する。漢訳そのものの吟味は興味を感じる人にお任せしたい。 罍

次号の公開は2021年1月1日を予定しています
清末小説研究会 <http://shinmatsu.main.jp>

陳景韓の漢訳プーシキン(下)

荒井由美

2 「神槍手」のばあい

問題の所在——母我と陳景韓の共訳

同じくプーシキン原作の陳景韓共訳「神槍手」について述べる。決闘を題材にした短篇小説だ。

こちらの底本を特定するのは困難がともなうだろう。

ひとつは公表時期である。先に刊行された陳景韓の漢訳「俄帝彼得」は『小説時報』第1期(宣統元年九月初一日(1909.10.14))掲載だった。しかし「神槍手」の同誌掲載は第13期でその2年後だ。時間の空白がある。

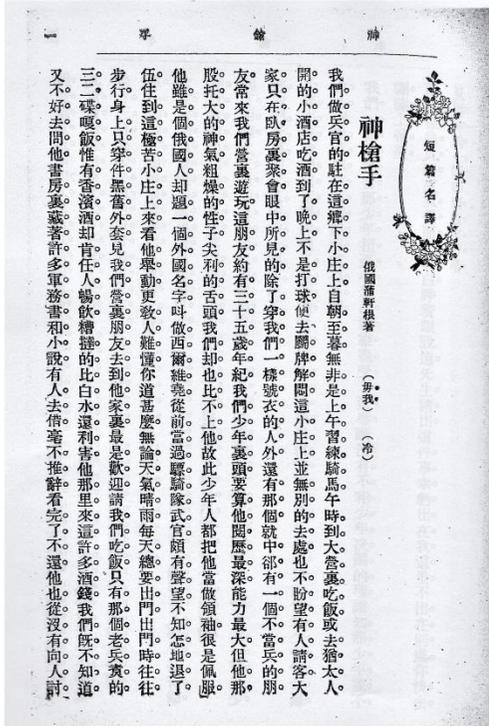
くわえて陳景韓の単独翻訳ではない。母我との共訳というのが以前とは異なる。考慮対象が増える。そのため底本探索が複雑化する。

言い直せば陳景韓の単独漢訳ならば日本語経由だろうと予想がつく。しかし「神槍手」のばあいは共訳だから単純にはいかない。つまり共訳者母我との関係を視野にいれる必要が生じるという意味だ。図式化すればロシア語→英語→漢訳か、あるいはロシア語→日本語→漢訳という2経路の可能性がある。その英語部分に母我がかかってくる。ついでながら筆名の母我が「論語」から取られているというのは本稿の目的と無縁と考えてよい。

雑誌初出と阿英、施蟄存の説明

漢語題名を日本語にすれば「名射手」となる。発表は次のとおり。

俄国蒲軒根著、母我、冷(陳景韓)訳「(短篇名訳) 神槍手」『小説時報』第13期 宣統三年八月十五日(1911.10.6)



該漢訳作品は阿英目録(1954/1957)には未収録だ。阿英は1961年に不足を補うかたちでプーシキン原作について以下のように解説した。

「叙例」「一九〇九至一九一三年、母我等纔繼續訳了他(注：普希金)的短篇《俄帝彼得》、《神鎗[槍]手》和《棺材匠》等，発表在《小説時報》裏。…(中略)…至《普希金小説集》，即《別而金小説集》的全訳，最早有一九二四年版的趙誠之訳本」*10

「俄帝彼得」「神鎗[槍]手」「棺材匠」などが『小説時報』に掲載されたこと、訳者は母我ら

だという。冷(陳景韓)は「等」の中に隠された。それにしても漢訳「俄帝彼得」は陳景韓訳であって母我は関係がない。おおよそを説明しただけのものだ。

とりあえずこの阿英の説明が手がかりになる。ただし「神槍手」と「棺材匠」は『別而金小説集(ペールキン物語)』に収録されるが「俄帝彼得」は別だ。正確な説明ではない。また1924年刊行(注：亜東函書館)だという趙誠之の漢訳本を示すのはただの参考のためだろう。『ペールキン物語』の漢訳としては最初のものという意味だ。のちの1924年に出版された趙誠之の漢訳本が底本になることはない(『小説時報』に掲載された漢訳の底本は別にあるから注意を要する。すでに「俄帝彼得」については説明した)。そういう細かな違いはあったとしても「神槍手」の原作について探索するためには以上でほぼ間に合う。

「神槍手」は『中国近代文学大系』11集26巻 翻訳文学集一(上海書店1990.10)にも収録された。

編者の施蟄存は解説して次のように書く。「這篇短篇小説(注：神槍手)，發表于1911年之《小説時報》，訳者母我，未詳何人；冷，即陳冷血，亦即陳景韓。此文原題為《射擊》(751頁)

原題を「射撃」と指摘しているのが新しい。なんでもなさそうな説明だが「母我」について未詳としたのは重要だ。施蟄存が不明と決定したからそれ以来「母我」について追求する研究者はいなくなった。

樽目録には PUSHKIN “THE SHOT” (“THE TALES OF THE LATE IVAN PERTOVICH BELKIN” 1831) と注釈をつけている。『ペールキン物語』に収録されているという記述だ。参考表示だからわかるのは大まかな状況のみ。英訳題名にしても何が底本かを明らかにしなければ完了しない。底本探索は別問題として存在する。ゆえにこちらも漢訳内容を検討する必要

があることはいうまでもない。

問題は母我の存在だ。陳景韓との共訳になっているのをどう考えるかがむつかしい。役割分担のことを言っている。陳景韓は日本語を理解した。その関係でいえばわざわざ共訳者として母我を掲げた理由があるはずだ。母我が英語にもとづき翻訳しただろう。その漢訳を校正するのが陳景韓だったというなら理解できる。

状況を推測しながらの探索になる。母我という人物そのものが不明であることが問題だ。そこから追求していかなくてはならない。それを明らかにした研究者は私の知る限り誰もいない。

母我という筆名

母我と署名のある作品をざっと見ていく。母我廬を名義とした作品を除き1919年以前の刊行で45点がある。そのうち翻訳は11点を数える。原作者がわかっている3例を紹介する。

1 「賽雪児」22回 (法) 大仲馬著、母我、冷血(陳景韓) 合訳『小説時報』11-13期 宣統3.閏6.5-8.15(1911.7.30-10.6) ALEXANDRE DUMAS père著。原名“LA ROBE DE NOCES”。更名“CÉCILE”。ALFRED ALLINSON 英訳“CÉCILE; OR, THE WEDDING GOWN” LONDON: METHUEN, ND (C 1910'S?)

2 「棺材匠」(俄) 蒲軒根著、母我訳『小説時報』17期 1912.12.1 PUSHKIN 著(渡辺浩司) Александр Сергеевич Пушкин (Aleksandr Sergeevich Pushkin) “Повести покойного Ивана Петровича Белкина (Povesti pokojnogo Ivana Petrovicha Belkina)”1831 中の“Гробовщик (Grobovschik)”

3 「岩窟王(西史小説)」(法) 岳珂著、母我口訳、覚奴筆述『娛閑録』1期-2巻3号 1914.7-1915.9.16 韓一字「不是VICTOR HUGO的作品, 是

ALEXANDRE DUMAS père 的 LE COMTE DE MONTE-CRISTO, 共100章, 未完」

大デュマとプーシキンの原作だ。母我は大デュマ作品をアリンソンの英訳から漢訳している(ただし3「岩窟王」については不明)。このアリンソンが重要だ。

アリンソン英訳本

アリンソン (ALFRED RICHARD ALLINSON, 1852-1929) はイギリスの学者、翻訳者。フランス語、ロシア語、ドイツ語、ラテン語など数カ国語に精通し翻訳も多い。彼の英訳本が清末民初時期にいくつか漢訳されている。それらに見える漢訳者陳无我が本稿には関連してくる。

アリンソン英訳の漢訳例を樽目録から抽出する(刊行年順)。陳无我(无我)に注目してほしい。

1 「宝琳娘(言情小説)」(法) 大仲馬著 (英) 愛靈生英訳 朱陶、陳无我重訳『新世界小説社報』4-9期 光緒32.10.21-33.8.23(1906.12.6-1907.7.3) / 漢訳題名同じ、(法) 仲馬著、朱陶、陳无我訳、新世界小説社1907

原作は ALEXANDRE DUMAS père 著、ALFRED RICHARD ALLINSON 英訳“PAULINE”1904。

2 「大俠盜邯洛屏」2冊(法) 仲馬著、(英) 合立森訳、中国公短重訳 新世界小説社 光緒33.1初旬(1907)

ALEXANDRE DUMAS père “ROBIN HOOD LE PROSCRIT” 1873. ALFRED RICHARD ALLINSON 英訳“ROBIN HOOD THE OUTLAW” 1904

3 ★「大風雪(奇情小説 短篇小説)」(俄) 大詩人家波喜京原著、(法) 小説名家仲馬原訳、(英) 愛靈生重訳、中国朱陶、陳无我同訳『中外日報』1907.10.24-11.2

POUSHKIN (PUSHKIN) 著、ALFRED RICHARD ALLINSON 英訳 “THE SNOWSTORM” (ALEXANDRE DUMAS père 著 “CROP-EARED JACQUOT AND OTHER STORIES” LONDON: METHUEN & CO. (1905) 所収)

4 「英雄美人頭 (新訳小説)」(法) 巴黎仲馬原著、(英) 倫敦愛靈生原訳、朱陶、陳无我重訳 『中外日報』光緒33.4.12-17 (1907.5.23-28)

ALEXANDRE DUMAS père 著、ALFRED RICHARD ALLINSON 英訳

5 「黄衫赤血記 (俠情小説)」(法) 大仲馬著、(英) 愛靈生訳、牢愁子重訳 新世界小説社 光緒34.7(1908)

ALEXANDRE DUMAS père 著、ALFRED RICHARD ALLINSON 英訳

6 「三銅幣」13節 (法) 亜歴山大徳謨原著、(英) 愛耳弗特愛力孫重訳、蟠(楊紫驎) 『時報』1911.2.3-5.22

ALEXANDRE DUMAS père 著、ALFRED RICHARD ALLINSON 英訳

アリンソンは漢訳されて愛靈生、合立森、愛耳弗特愛力孫と表記される。上の例をみれば清末の中国で人気のあった英訳者のようだ。フランスの大デュマ原作を英訳した。それにもとづいて漢訳が出ている。

以上のうちの3種類に漢訳者の陳无我、陳无我がある。その3★にプーシキン原作(★印は注意を促す意味で付加した)、大デュマ原訳、アリンソン英語重訳、陳无我漢訳の「大風雪」があることに留意する。アリンソンによって英訳された。それにもとづいて陳无我が漢訳したという順序だ。

陳无我と母我

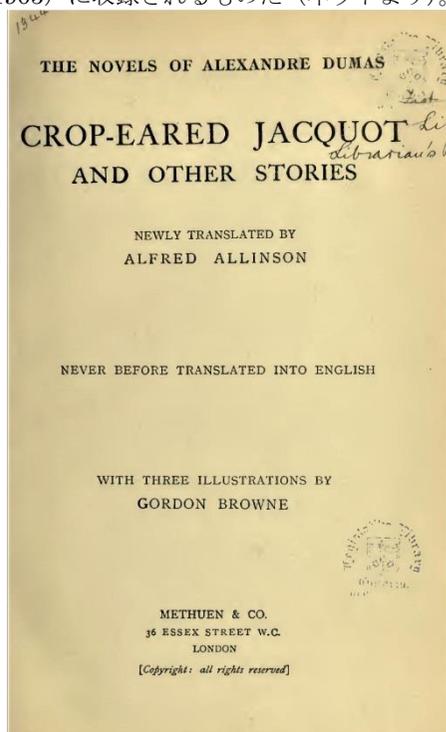
陳无我の无[wu]我は誤植されて无[ji]我となることが多い。陳无我であっても同じだ。上の

1「宝琳娘」を見てもらえばその実例であることがわかる。同じ翻訳の初出と単行本での重訳者が陳无我と陳无我だ。まぎらわしい漢字だから植字工が間違ふことがある。編集者も見逃す。いうまでもなく同一人物にほかならない。

陳輔相は浙江杭県(今杭州)の人。字は無我。南社社友(陳玉堂711頁)。陳无我『老上海三十年見聞録』(上海書店出版社1997.1)がある。

この陳无我が同音の母我と重なる。つまり母我(陳无我)がアリンソン英訳を底本にしてプーシキン作品を中国に紹介したのではないか。これが筆者の推測1だ。无我を使用する複数人物を見ても陳无我よりほかに該当しない*11。

上の3★「大風雪」を鍵作品にする。このプーシキン作品の底本は ALEXANDRE DUMAS père 著、ALFRED (RICHARD) ALLINSON 英訳 “CROP-EARED JACQUOT AND OTHER STORIES” LONDON: METHUEN & CO. (1905) に収録されるものだ(ネットより)。



大デュマの作品を英訳した“CROP-EARED JACQUOT”が表題に使用されている。同書に収録されたそのほかの物語がプーシキン

(STORIES FROM POUCHKIN) からの3作品だ。“THE SONWSTORM” “A FINE SHOT” “THE COFFIN-MAKER” である。もとは『ペールキン物語』としてまとめられた。ほかならぬこの3作ともに漢訳がある。

それぞれに中国における漢訳者、発表年および掲載紙(誌)を当てはめてみる。

“THE SONWSTORM” 「大風雪」 朱陶、
陳无我同訳 『中外日報』1907

“A FINE SHOT” 「神槍手」 母我、冷
(陳景韓) 訳 『小説時報』第13期1911

“THE COFFIN-MAKER” 「棺材匠」
母我訳 『小説時報』第17期1912

くり返すが3篇ともにアリンスン英訳だ。しかもそれに陳无我と母我がかかわっている。偶然とは思えない。上を見るかぎり陳无我と母我が同一人物としても違和感がない。ふたりが別人であったならば陳无我と母我が同一訳本に出現する作品もあるはずだ。ところが樽目録を見る限りその事実はない。ならば同一人物だという推測2に至る。陳无我(母我)を軸にして漢訳作品が生まれている。安定して収まっていると感じる。

漢訳、英訳、日訳の比較対照

「神槍手」と漢訳されているその表現に注目する。

ロシア語原文では“Выстрел”だから「発射」という意味だ。日本語では「射撃」「一撃」あるいは「その一発」(神西清訳)と訳される。「決闘」とするのは内容にもとづく。施塾存が指摘しているように普通の漢訳は「射撃」だ。英訳では“THE SHOT”あるいは“THE PISTOL-SHOT”などに一致する。

それが漢訳で「神槍手」というのは理由がある。英訳の“A FINE SHOT”が底本であれば両者はつながる。英訳は「素晴らしい射撃」あ

るいは「名射撃手」である。“fine”が漢訳「神」すなわち日訳で「名射手」の「名」と重なる。直訳とっていい自然さがある。

アリンスン英訳の“A FINE SHOT” (“CROPEARED JACQUOT AND OTHER STORIES” 1905所収)が漢訳底本の最有力候補だ。

プーシキン作の冒頭といくつかの場面を取り上げる。まず漢訳を示してそれに該当するアリンスン英訳を示す。

[漢訳] 我們做兵官的。駐在這鄉下小庄上。
／晚上不是打球。便去鬪牌解悶。

私たち兵士はこの田舎の小村に駐在していた。／夜は球技かカードで憂さ晴らしをした。

[アリンスン] “We were stationed at a small country town.” / “in the evening, the punch-bowl and cards” p.101

私たちは小さな田舎町に駐屯していた。／夜はパンチとカードだ。

漢訳英訳ともに村名あるいは町名を示さない。底本となる可能性があるほかの英訳、日訳を見ればアリンスン英訳がそれらとは異なっていることがわかる。英訳題名と該当箇所をまとめる。

[TELFER] THE PISTOL-SHOT. / “We were quartered at ——” / “and cards and punch in the evening” p.183

[EDWARDS] THE PISTOL SHOT. / “at the little village of Z” / “and in the evening punch and cards.” p.70

[KEANE] THE SHOT. / “in the little town of N——” / “in the evening, punch and cards.” p.327

英訳各種は駐屯地を記号、あるいは「Z」「N」を使用して匿名だ。陳景韓漢訳とアリンスン英訳にはもともとそれがない。また “punch-bowl”

は酒だが母我はそれを「打球」に誤解した。punch に引かれたようだ。ロシアの兵士が球技で憂さ晴らしというのは理解しにくい。翻訳者の母我が誤解すれば共訳者の陳景韓はそれに従うしかない。

参考にする日本語訳は以下のとおり*¹²。底本の可能性を考えて漢訳の公表(1911)よりも時間的に先行する日訳を選択した。ただし神西訳はあくまでも参考のために示している。

原著者なし、徳田秋声「復讐」『中学世界定期増刊』4巻12号1901.9(未見)。略号[徳田01][佐藤0101]

不明、徳田秋声「露西亜人」原田春鴻編『三尺剣』国民書院1904.8(未見)。略号[徳田04][佐藤0407]

プシキン、三津木春影訳「射撃」『戦争文学』明治38年(1905)2月(未見)。略号[三津木][佐藤0501]

プシキン、梧桐夏雄訳「決闘」『帝国文学』第13巻第2-3号、明治40年(1907)。略号[梧桐][佐藤0702]

プシキン、与謝野寛、茅野蕭々訳「一撃」『新小説』第14巻第5号、明治42年(1909)5月1日。略号[与謝野][佐藤0901]

プシキン作、神西清訳「その一発」『スピードの女王・ベールキン物語』岩波文庫1967.5.16/2010.5.25第5刷。略号[神西]

原題が「射撃」だが小説の内容は「決闘」だ。梧桐の日本語訳名「決闘」も間違いではない。それらの冒頭と関連部分を見る。

[徳田01]吾等が丁度Zといふ一小村に駐屯してゐた時の事で、晩は又ポンチを酌んで、 ترامプを弄ぶのがお定まりで。[佐藤0101]

[徳田04]自分達が曾てY……と云ふ一小村

に赴任してゐた時の事で。／晩は則ちポンチ骨牌といふのがお定まりである。[佐藤0407]

[三津木]私達の成衛して居つたのはN町である。／夕は骨牌三昧[佐藤0501]

[梧桐]なにがしの小市に滞在しける折のことなり。／夕は酒と骨牌とにて過さる。

251頁

[与謝野]吾々は成衛の為にN町に居つた。／それから夕方は骨牌と本西(プシユ)

59頁

[神西]私たちは***という小さな町に駐屯していた。／さて晩になればポンスと骨牌だ。75頁

「Z」「Y」「N町」「なにがし」「***」ともに匿名にしていることを確認する。漢訳とは離れる。

兵士の仲間に軍人ではないシルヴィオという中年男性がいた。彼の家招かれてシャンパンを馳走になる。カードが始まる。その些細な部分を示す(下線は筆者)。英訳はその下線部分のみに訳をつける。

[漢訳]偏巧那天晚上。有個新入夥的少年。調到我們營裏。沒有許多日子。看着奇怪。便押個雙注試試。

ちょうどその晩に新しく仲間入りした青年がひとりいた。われわれの隊に転任してきてそれほど日にちがたっていなかったのが見れば奇妙なことに二重に金を掛けていたようだった。

[アリンソン] “but on this particular evening he company included a young officer who had only lately joined the regiment; presently, his attention wandered from the game, and he put on a double stake;” p.102／彼は二重に賭け金を置いた。

新しくやってきた士官がカード競技中に誤った操作をした。それを見たシルヴィオがいつものとおり何も言わずに記録したという場面だ。ロシア軍内部の賭けカードのことで内容はよくわからない。神西訳と注釈を引用する。

[神西]ところがここに一人、近ごろ私たちの隊へ転任してきた仕官がまじっていた。彼も勝負に加わっていたが、ついうっかりして札の稜を余計に折ってしまった。78頁／注：札の稜を余計に折って——カルタのかどを折ることは、賭け金を増すことを意味する。217頁

神西の注釈「掛け金を増す」が本来の意味らしいことはわかる。見ればアリンスン英訳は「二重に賭け金を置いた」としてそこをうまく訳しているといえる。また漢訳は英訳に忠実だ。該当箇所についてほかの英訳は次のとおり。文末の賭け金部分を見てほしい。

[TELFER]“But of our number there was a young officer who had lately joined. He took part in the game, and in a fit of absence bent down one corner too many.”p.185

[EDWARDS]“But among us on this occasion was an officer who had but lately joined. While playing he absent-mindedly scored a point too much.”p.72

[KEANE]“but among us on this occasion was an officer who had only recently been transferred to our regiment. During the course of the game, this officer absently scored one point too many.”p.329

カードのかどを折る、とそのまま翻訳したのでは意味が不明だと考えられたらしい。英訳は

直訳ではなく変化をもたせた。賭け金をあまりにも多く (too much、too many) 置いたに置き換えている。アリンスン英訳が上の複数英訳とは合致しないことも理解できるだろう。

漢訳が日訳とも異なることを示すために引用する。

[梧桐]この日、われ等が仲間のうちには、近き頃、わが隊に移り来りたる一人の士官のあるあり。骨牌の半ばにして、何心ともなく計算を誤りけるまゝに、 254頁
[与謝野]唯一人近頃新たに聯隊に來た若い士官が有つて、骨牌遊びに加はつて居たが、放心してパロリの札を折つた。61頁

梧桐訳では「計算を誤り」と意識した。与謝野訳にある「パロリ」とは本来は倍賭法ともいう単語を意味する。賭け事に使う隠語のようだ。そのまま翻訳に使用されても理解する読者は少なかつたのではないか。

以上を見ても漢訳はアリンスン英訳を底本にしていることが確認できると考える。同じく細かい表現を参考までに提示する。

サーベルと軍服

布施英憲がプーシキン原作「その一発」に見えるひとつの描写を取り上げて論じた^{*13}。

シルヴィオが決闘相手を待ってじりじりしている場面だ。その相手のいでたちが問題になる。軍服を脱いでいるのかいないのか。それをサーベルにひっかけているのか否か。微妙な表現だ。軍服を着ているのかそうではないのかはっきりしないところが不思議なところだ。

ロシア語の前置詞をめぐる解釈の問題になる。布施の理解ではそのロシア語前置詞を着用の意味に把握するのは無理だという。着用とするならば別の前置詞でなければならないという主張だ。結論としては「軍服を脱いで、着ていない」[布施95-25]状態となる。ただし次にサーベル

と軍服の関係に問題が移動する。簡単に問題は解決しない。

布施の論文はロシア語原文、日訳、英訳、独訳、仏訳の該当箇所を抽出して展開する。本稿でそのすべてを紹介するつもりはない。漢訳の底本探索に関係のありそうな部分だけに限定する。

布施はまず神西を引用し、次に米川正夫訳を示す。同じ個所であるにもかかわらず訳文が異なることを指摘する。問題の存在を理解するために紹介する。

[神西]すると遙か彼方に奴の姿が見えました。たった一人の介添人を連れて、サーベルを軍服の下にだらしなく引きずりながら、徒歩でやって来るのです。86頁

[米川正夫]と、遙かあなたにやつ姿が見えました。軍服を刀で擔ぎながら、たった一人だけ介添人をつれて、てくてく歩いてくるぢやありませんか。(「残された一発」『露西亜短篇集』河出書房1936[布施95-19])

上にみるようにロシア語原文から翻訳したふたりの記述が異なる。神西訳では軍服を着ている。米川訳は軍服を脱いで刀で担いでいる。

多数の訳文を引用しながら緻密に論を進める。手間のかかった論文であることを理解する。検討した結果はつぎのようになった。

[布施95-36]彼はたった一人の介添人を連れて、軍服を腰のサーベルに引っ掛けて、徒歩でやって来るのです。

「軍服を腰のサーベルに引っ掛けて」という原文の解釈はそれでいい。ただし各種翻訳ではなぜそのように複雑で煩雑なことになるのか理解しにくい。

10種類以上の翻訳がそれぞれ微妙に異なる原

因はプーシキンの原文そのものがあいまいにしか書いていないからだろう。どのようにも解釈ができる表現だということだ。ただし作品のうしろにはまだ説明がある。シルヴィオの決闘相手は片手にサクランボのつまんだ帽子を持っていた。決闘になって自分が標的にされる時もサクランボを食べながら種をシルヴィオに吹きかけてくる。ならば歩きながらもサクランボを食べていたはずだ。片手にサクランボ帽子を持ちもう片方の手でそれからつまんで食している。だから軍服をサーベルで担ぐのは考えにくい。引っ掛けていたと理解するのが自然だ。

というわけで布施の解釈が妥当である。ただし原文の理解と漢訳の底本は直接には結びつかない。英訳がどうなっているのかの方が重要だ。英訳が誤解をしていたら漢訳も間違うだろう。

[漢訳]正在此時。忽見那敵人把宝刀挑着小褂。大踏步走来。看他後面。只跟着一个証人。／他却舒舒坦坦。手裏托一頂大帽。帽裏裝滿了一帽的野櫻桃。

ちょうどその時、見れば敵がサーベルで上着を担いで大またで歩いて来るのです。彼の後ろからはたったひとりの証人がついています。／彼は心地よさげに手には大きな帽子を持っています。それには野生のサクランボで一杯でした。

[アリンスン]when I perceived my antagonist arriving on foot carrying his military jacket on the end of his sabre, and accompanied by only one second. / he came towards us, holding in his hand his cap, which was full of wild cherries. p.104

気づいてみると私の敵が軍服をサーベルの端に担いで歩いて来るのです。たったひとりの介添人しか伴っていません。／彼は野生のサクランボで一杯になった帽子を持って私たちにむかってきます。

アリンソン英訳が軍服をサーベルで担いでいるから漢訳もそうしたとわかる。

煩雑なのでほかの英訳については注にまとめた。3種類の英訳はサーベル(軍刀)と軍服の形態を訳していない*14。

[EDWARDS]から決闘場面の挿絵を引用する。シルヴィオは画面の奥でピストルを構えている。手前で帽子のサクランボをつまんでいるのが決闘相手だ。左に介添人ひとりが立っている。軍服を着ている。相手のサーベルは描いていない。もとづいた英訳に記述がないからだ。



"HIS LIFE AT LAST WAS IN MY HANDS."

日本語訳を参考までに見ておく。

[三津木]手甲をして、剣の上に制服を覆って、只一人の証人と歩いて来る。[布施95-22、23]

[梧桐]遠き方に彼の来るさま見よ。彼は徒歩し、介添人一人うち連れたり。／彼亦近づく。その手に持ちたる帽のうちには、桜の果あふれぬ。365頁

[与謝野]唯一人の証人を伴れて正服の上着は脱いで剣の上にかけて、襦袢のまま徒歩で歩いて来る。／近寄つて見ると、彼の手に持つてる帽子の中には一杯桜実が入つて居る。66-67頁

三津木訳と与謝野訳はロシア原文のままだ。

梧桐はサーベルと軍服を出さない。

以上日訳3例ともに漢訳の底本にはならない。

結 論

以上をまとめる。

陳景韓の名前を出した漢訳プーシキンは単独訳「俄帝彼得」と共同訳「神槍手」がある。底本探索の過程で見いだした新しい事実は次のとおり。

- 1 陳景韓の来日時期を確認する資料を示した。陳景韓は日本語を理解する。
- 2 陳琦という新しい名前を提出した。
- 3 陳景韓が単独で漢訳したプーシキン「俄帝彼得」の底本は日本語である。プーシキン作、昇曙夢訳「心づくし(原名「彼得大帝の黒人」)」(『新小説』明治40年(1907)2月1日)だ。これは後の昇曙夢『(露国名著)白夜集』(章光閣1908.11.25)に収録される際に「黒人」と改題された。
- 4 母我は陳无我(旡我)と同一人物であるという新説を提出した。プーシキン作品の英訳を翻訳した鍵人物が母我だ。
- 5 その英訳者は ALFRED (RICHARD) ALLINSON である。
- 6 母我、陳景韓共訳の「神槍手」は英語訳を底本とした。ALEXANDRE DUMAS 著、ALFRED (RICHARD) ALLINSON 英訳“CROP-EARED JACQUOT AND OTHER STORIES” LONDON: METHUEN & CO. (1905) だ。これに収録された STORIES FROM POUCHKIN がある。その3作品のひとつが“A FINE SHOT”である。
プーシキン作品の日訳と英訳をできる限り集めた。それらと漢訳を比較対照して得た結果だ。反論を考えている人に重ねて願う。
陳琦は陳景韓ではないというのであれば具体的な資料を提示いただきたい。日本語の底本についても同様だ。
また母我が陳无我と同一人物ではないという

のであれば証拠を示してほしい。英語の底本も同じである。これだという動かぬ英訳を提出する必要がある。

以上の条件を備えている反論のみを受け付ける。
 罫

【注】

- 10) 阿英編『晚清文学叢鈔・俄羅斯文学訳文巻』北京・中華書局1961.10。1-2頁
- 11) 无我を号、筆名とする人物を陳玉堂より引き抜く。宋雲彬（1897又1898-1979）、林尹民（1887-1911）、羅章龍（1896-1995）、王鶴（1940年時已逾50歳）。年齢などを見ればいずれも陳无我とは関係がない。
- 12) 次を参照した。佐藤繁好『日本のプーシキン書誌：翻訳・紹介・研究文献目録』ナウカ株式会社1999.12.4。略号[佐藤]。数字は通し番号／／2020.4.18日本の古本屋へ注文した／4.23受領
- 13) 布施英憲「с мундиром на сабле 再考」藤女子大学・藤女子短期大学『紀要』第32号 1995.2.10 電字版。略号[布施95]参考文献：浅岡宣彦「『その一発』」大阪市立大学部紀要『人文研究』第48巻第2分冊 1996
- 14) 英訳3例。
 [TELFER] He was on foot, in uniform, wearing his sword, and accompanied by one second. 軍刀あり。ただし身につけているというだけ。/He approached, holding his hand his cap, which was full of cherries. p.191
 [EDWARDS] He was on foot, accompanied by only one second. 軍刀なし/He approached, holding in his hand his regimental cap filled full of black cherries. pp.81-82
 [KEANE] He was walking on foot, accompanied by one second. 軍刀なし/He approached, holding his cap filled with black cherries. p.334

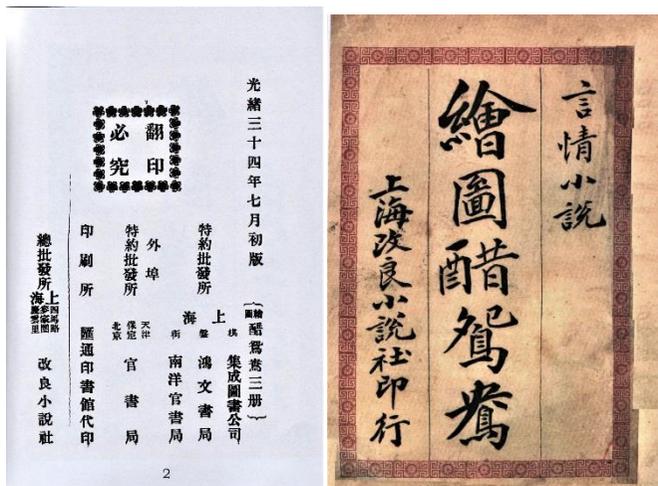
漢訳クレイ『醋鴛鴦』の原作

神田 一三

はじめに

漢訳『醋鴛鴦』といっても筆者が見ているのは影印本1冊にすぎない。

表紙は「言情小説／絵図醋鴛鴦／上海改良小説社印行」、三編、第12-18章。3冊、光緒三十四年七月初版。



影印本 表紙と奥付

「三編」と表示する第12-18章のみである。柱に「説部叢書」と記す。奥付にある「絵図／醋鴛鴦三冊」というのはこの「三編」を指していると理解する。6冊のうちの第3冊だ。もとは線装本である。

参考資料として孔夫子旧書網に掲載された写

真を見る。掲げて全6冊のうちの4冊だ。ただし初版については明示しない。そこにあるのは「宣統元(1911)年二月再版」である。写真によれば初版と再版の版組は同じ。第1冊の冒頭に13丁だから裏表で合計26種の絵図を配する。これが「絵図醋鴛鴦」とする理由だ。



孔夫子旧书网より

著作者、翻訳者名は「美国盤山克蘭著、西泠生訳」である。原作者が BERTHA M. CLAY (本名 CHARLOTTE MARY BRAME、1836-1884) であることはわかる。イギリス人で本名はブレイムという。バーサ・M・クレイはその筆名でアメリカにおいて有名なのは周知の事実だろう。大衆小説作家で作品がとても多い。

訳者の西泠は不詳。編纂書として『新文章遊戯』(新小説社 光緒三十三年十一月月中旬出版)があることが判明しているだけ。

クレイ作品は日本でも有名だ。尾崎紅葉、菊池幽芳、黒岩涙香らが種本として使用したことが広く知られる。

著名なのは末松謙澄訳『谷間の姫百合』だろう。当時のベストセラー『ドラ・ソーン DORATHORNE』を底本にした。問題は幽芳訳『乳姉妹』である。物語のある部分が『ドラ・ソーン』に似ている。日本ではそれを根拠に1世紀をこえて『乳姉妹』は『ドラ・ソーン』を換骨奪胎した翻案ものだと誰もが決めつけて論じた。だが事実は別作品の『ライル卿の娘 LORD

LISLE'S DAUGHTER』が底本なのだった。

クレイが作品を量産した大衆小説家であることを忘れてはならない。『ドラ・ソーン』に似た粗筋を持つ作品をほかにも書いているという事実だ。

日本で幽芳『乳姉妹』の原作が『ドラ・ソーン』だと誤解されたのはどう考えても奇妙だった。研究者の多くがなにか特別な思い込みをしていたようだ。思い込みだから根拠はもとから存在しない。間違いであることに気づかないまま『ドラ・ソーン』に一致しない部分(別作品だから当たり前だが)を勝手に解釈して幽芳の創作にしてしまった。

中国でもクレイ小説の漢訳がいくつかある。『懺情記』『古王宮』『紅涙影』『僵桃記』『空谷蘭』『乳姉妹』『一束縁』などだ。これらについては原作が判明している。英文原作からの直訳、日本語経由などと分かれている。ところが日本でも有名な『ドラ・ソーン』はこの漢訳には含まれていない。『紅涙影』『乳姉妹』『一束縁』があるのではないかと思われる読者もいるだろう。だがそれらの底本はクレイ作『ドラ・ソーン』ではないのだ。すでに確認済みである。

原作不明の漢訳は次のとおり。『醋鴛鴦』『金縷衣』『曼玳琳』『密誓縁』『想夫憐』『鴛盟離合記』などだ。これらのなかに『ドラ・ソーン』があるのかどうかはわからない。今後の問題になる。

本稿では『醋鴛鴦』の原作について説明する。

『醋鴛鴦』の原作を探索する

手元にある影印本の第12章の冒頭を示す。

棣賓赫司主人長眠塚中後閱十四月。一日午前。陽光明媚。柳思桓夫人携書挈加塞林至園中一大杉樹下閑坐。時老人適來存問韜羅。偕坐樹陰中。老人閑吸淡菇巴。韜羅為誦新聞紙。加塞林則匍匐老人膝旁。牽衣捉杖為

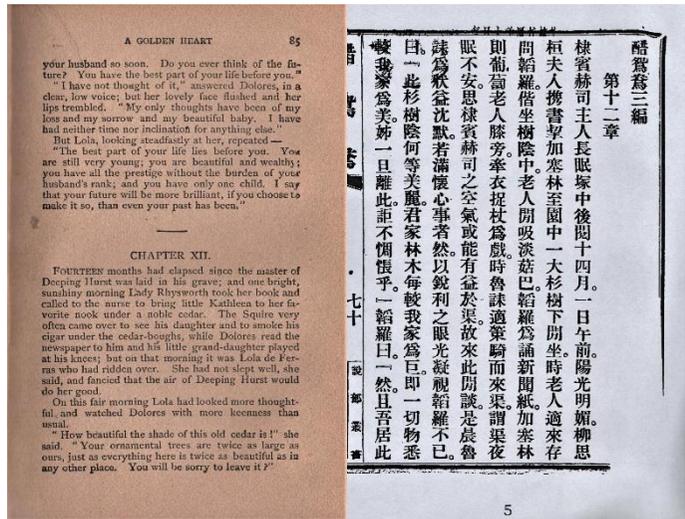
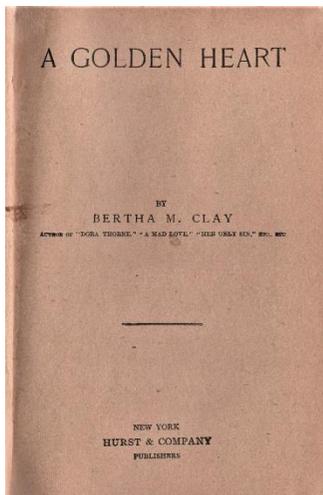
戯。時魯誅適策騎而來渠。謂渠夜眠不安。思棣賓赫司之空氣或能有益於渠。故來此閑談。70丁才

棣賓赫司の主人が永眠して14ヵ月が経過した。陽の光がうららかなある日の朝、柳思桓夫人は書物を持ち加塞林を連れて庭の大きな杉の木の下に座った。その時、老人がちょうどやってきて韜羅に言葉をかけて木陰に座った。老人はのんびりとタバコを吸う。韜羅が新聞を読み上げている間、加塞林は老人の膝傍に腹ばい服を引っ張り杖を握って遊んでいる。その時、魯誅が馬でやってきた。彼女が言うにはその夜は眠れなかったのもしかしたら棣賓赫司の空気がいいかもしれないというのでおしゃべりに来た。

加塞林はキャサリンだろうか。「淡菇巴」は誤植で「淡巴菇(タバコ)」とするのが普通だ。それ以外の固有名詞について翻訳することはできない。作中人物の名前は特にむつかしい。その漢訳音にもとづいて英語原文を推測するのは例外を除いて基本的に無理がある。

全6冊のうちわずかに1冊のみを見ている。これだけでは雲をつかむようなものだ。原作を探すのは困難に思えた。クレイ原作であることだけが手がかりだ。それでもなんとかして次の作品を探し当てた。

BERTHA M. CLAY "A GOLDEN HEART."
NEW YORK: HURST & COMPANY, 刊年不記
(1883)



初出は無署名。週刊誌「FAMILY HERALD」, 1881.12.3-1882.2.25に連載されたという[LAW12]。漢訳と一致する個所を示す。

CHAPTER XII.

FOURTEEN months had elapsed since the master of Deeping Hurst was laid in his grave; and one bright, sunshiny morning Lady Rhysworth took her book and called to the nurse to bring little Kathleen to her favorite nook under a noble cedar. The Squire very often came over to see his daughter and to smoke his cigar under the cedar-boughts, while Dolores read the newspaper to him and his little grand-daughter played at his knees; but on that morning it was Lola de Ferras who had ridden over. She had not slept well, she said, and fancied that the air of Deeping Hurst would do her good.

p.85

固有名詞について原文と漢訳を抜き出す。

「Deeping Hurst / 棣賓赫司」「Lady Rhysworth / 柳思桓」「Kathleen / 加塞林」「Dolores / 韜羅」「Lola de Ferras / 魯誅」と

対応する。「The Squire/老人」としたのは微妙だ。大地主を固有名詞扱いにしたものか。加塞林は Kathleen (キャスリーン) だった。

上の英文原作を見れば漢訳はほとんど直訳になっている。

若くして未亡人となったドロレスがローラと再婚について会話する。これが第12章の内容だ。その途中でローラはカール卿 (Sir Karl/カール男爵) が近くイギリスに帰国するとドロレスに告げた。

英語原文をどのように漢訳したか。その例をもう少し挙げておく。

CHAPTER XIII.

SIR KARL was in Italy when he read the news of the sudden death of Lord Rhysworth, and understood that the woman he loved was free. His first feeling was one of sorrowfull regret. He had always esteemed and liked the master of Deeping Huest, and it seemed sad that he should die so soon after his marriage with a girl whom he loved so dearly. His second thought was that Dolores was free. pp.89-90

カール卿がリースワース卿の突然死をニュースで読んだのはイタリアにいる時だった。そして彼の愛した女性が自由であることを理解した。彼の最初の思いは悲しみに満ちた後悔だった。彼はいつもディーブ・ヒューストの主人を尊敬し好きだった。そして彼がとても愛した女の子とその人が結婚するなり死んだのは悲しいようでもあった。彼の第二の思いはドロレスは自由だということだった。

カール卿はドロレスを愛していた。その彼女が夫を突然失った。今の彼女は自由だ。これが重ねて記述されている。作者のクレイはそこを

強調しながら物語を展開していく。

上の部分について漢訳はどのように対応したか。

第13章

カール男爵聞柳思桓勳爵凶耗時。在意大利聞之。如遭劈頭一擊。悲悼至深。念此良友。方誦好述之什。乃頓遭此慘變。誠出意料外。鄰笛山陽。能無聞而嗚咽耶。繼念其所愛之人今乃自由無羈矣。73丁オ

カール男爵がリースワース卿の凶報を聞いたのはイタリアにいる時だった。まるで頭の一撃を受けたように悲しみは深かった。この親友を思えばよきつれあいなどと賞賛していたところだった。ところがこの惨事に突然遭ってしまう。誠に意外なことだった。隣人の吹く笛の音が聞こえて亡くなった友人を思い悲しみむせび泣かないでいられようか。続けてその愛する人が今は自由で束縛がないことを考えるのだった。

中国での常用句を織り交ぜながらほぼ原文に忠実な漢訳になっている。クレイ原作に見える「ドロレスは今は自由だ」という重複はくどいと考えたのかひとつに絞った。

見れば章全体をそのまま漢訳している。

第14章の1カ所を紹介する。旅行から帰国したカール卿がローラに夕食を一緒にしようとして強く勧められて「いやしかし……」と言いつつ即答しない場面だ。

“‘But me no buts!’” laughed Lola.

“Now you must consent. I have heard you say that a line from Shakespeare would reconcile you to anything.” p.94

「しかし、しかしの連発はダメ！」とローラは笑った。「ご承知なさらなくちゃ。シェイクスピアからのその台詞で何事ともうまくやっっていけるとおっしゃってい

るのを私は聞いたことがあってよ」

台詞にシェイクスピアからの引用がある。もの本によると使用例は莎氏ではないらしい。英国の Suzanne・セントリヴァー (Susanna Centlivre) が1701年に戯曲 “The Busie Body” の中で初めて使ったとされる。クレイの勘違いかもしれない。

魯誅大笑曰。『But me no buts (訳者按此索士比亞詩篇中語) 我嘗聞君言索士比亞一句詩可以調解一切。君今可允我求矣。』76
丁ウ

ローラはニッコリ微笑んで言った。「しかし、しかしの連発はダメ (訳者注: シェイクスピア戯劇中のことば)。シェイクスピアのその台詞ですべてがうまくいくとあなたから聞いたことがあってよ。私の願いをかなえてくださるなくちゃ」

漢訳に英語原文をそのまま引用するのは対象とする読者を知識人だと想定しているのだろうか。一般の読者を相手にするならば原文を使用しないのではないかと考えるからだ。

清末の漢訳を研究対象にするばあい日本語経由の作品例があげられることがある。英文原作が日本語に翻訳されたものをさらに漢訳するという経路だ。確かに日本語経由の漢訳も多い。しかしそれしかないというわけではない。だからその一方的な方向しか存在しないと考えれば誤る。英語を理解した中国人も大勢が存在した。日本語とは関係なく直接英語原文を底本にする漢訳もあるのだ。

クレイ原作でいえば『紅涙影』『一束縁』がそうだった。この2作品は日本語とは関係がない。英語原文から独自に漢訳された作品である。

独自漢訳として『醋鴛鴦』もあげることができる。

本稿は原作を特定して終わりとする。なにし

ろ漢訳6冊があるうちの1冊しか見ていない。これ以上説明するわけにはいかないのだ。全体を読むことができる日がくることを願っている。

☐

【参考文献】

[Law12]Graham Law, Gregory Drozd, Debby McNally, *Charlotte M. Brame (1836-1884). Victorian Fiction Research Guide* 36[Version 1.1 (May 2012)]

★

『清末小説から』第136号 2020.1.1

いくたびかの阿英目録26 ……樽本照雄
『環瀛誌陰』の原作 ……沢本香子
包天笑「空中戦争未来記」など(中) ……荒井由美
漢訳小説「ヴェニス商人」(下)
—「一磅肉」と「一斤肉」 ……沢本郁馬
喋血生:曇花一現的清末小説翻訳家 ……梁艶、王玉

『清末小説から』第137号 2020.4.1

いくたびかの阿英目録27 ……樽本照雄
劉家公認の贋作『老殘遊記』 ……神田一三
包天笑「空中戦争未来記」など(下) ……荒井由美
付建舟『商務印書館<説部叢書>叙録』について
……………樽本照雄
関于林訳小説口訳者力樹萱の一則材料 ……梁艶、王玉
【再録】菊池幽芳『乳姉妹』の原作(速報)
……………樽本照雄

『清末小説から』第138号 2020.7.1

菊池幽芳『乳姉妹』の原作(誤解の系譜1)
……………樽本照雄
陳景韓の漢訳ブーシキン(上) ……荒井由美
清末《旅客》雑誌小説目録 ……梁艶、王玉

『一東縁』と日訳『乳姉妹』

(誤解の系譜 2)

樽本照雄

問題の所在

日本近代小説研究界に従来から存在する定説について簡単に述べて復習とする。

バーサ・M・クレイ (本名シャーロット・M・ブレイム) 原作の『ドラ・ソーン DORA THORNE』からはじまる。それが末松謙澄訳『谷間の姫百合』になった。これがひとつ。ふたつ目は同じ『ドラ・ソーン』にもとづき翻案したのが菊池幽芳『乳姉妹』というもの。

以上の説明は学界において動くことがなかった。定説だからいうまでもなく異論をとらえる研究者はいない。

日本中国台湾においてそれをふまえて出てきたのが漢訳『一東縁』、『紅涙影』、あるいは漢訳『乳姉妹』への日本からの影響である。

根底にクレイ『ドラ・ソーン』が存在すると研究者たち全員が共通して承認し認識している。英文原作が日訳、漢訳されたという構造である。そう把握して100年以上が経過する。

『谷間の姫百合』と『乳姉妹』については両者の影響関係が濃厚にあると認定されていた。ところが事実は異なった。同じ原作だと考えられていたが実は別作品というのが真相だ。ゆえに『谷間の姫百合』と『乳姉妹』を同根の作品として比較対照し論じることは基本的に無意味だった。

『谷間の姫百合』の原作はシャーロット・メアリ・ブレイム (CHARLOTTE MARY BRAME。筆名バーサ・M・クレイ BERTHA M. CLAY) 『ドラ・ソーン』 (1871初出) でよい。

一方『乳姉妹』の原作も同じくブレイム (筆名クレイ) の作品だ。ただし『ドラ・ソーン』ではなく『ライル卿の娘 LORD LISLE'S DAUGHTER』 (1871初出) である。従来は幽芳訳『乳姉妹』と濃厚なつながりがあるといわれてきた漢訳『一東縁』『紅涙影』だ。当然のことながらその関係も見直さざるをえなくなる。

本稿ではまず漢訳『一東縁』と日訳『乳姉妹』をめぐる従来の説明を確認しておく。問題がどこにあるかを明確にするためだ。その後に具体的な漢訳状況を検討する。以上を行えば自然に『一東縁』と『乳姉妹』の関係が判明するという順序である。

誤解にもとづく立論

先行論文から引用する。問題は『ドラ・ソーン』をめぐる日本語訳と漢語訳との関係なのだ。前稿と重複する箇所がある。ご了解いただきたい (引用が続く。結論を知りたい人は「漢訳『一東縁』とブレイム『ライル卿の娘』」へどうぞ)。

精力的に論文を公表している飯塚容からの引用が多くなる。先行文献は後の研究者の指針になる。その役割を飯塚論文は十分にはたしていると思う。主として論文3本から以下のとおり (略号は後ろの参考文献を見てほしい)。

[飯塚08-141][飯塚09-47][飯塚14-147]はほぼ同文]春柳劇場版の『姉妹花』は、陸鏡若が日本から持ち帰った菊池幽芳の『乳姉妹』であると思われる。さらに遡れば、この作品は末松謙澄訳の『谷間の姫百合』、そして原作のイギリス小説バーサ・エム・クレイ (Bertha M. Clay) の『ドラ・ソーン (Dora Thorne)』にまで行き着く。

【飯塚08-146】【飯塚09-53】【飯塚14-152】『乳姉妹』は『谷間の姫百合』のような翻訳ではなく、原作を大幅に書き換えた翻案となっている。

【飯塚08-147】【飯塚09-53】【飯塚14-153】君江が素性を偽って侯爵家に入るという筋立ては『ドラ・ソーン』には見られなかったもので、もしかすると幽芳は別の種本をもう一つ混在させているのかもしれない。

新聞広告の翻訳【飯塚08-149】【飯塚09-56】【飯塚14-156】小説『一束縁』はイギリスの李来姆原作で、日本人がこれを舞台化して好評を得た。

【飯塚08-150】【飯塚09-57】【飯塚14-157】ところが『一束縁』を読んでも、その内容は『ドラ・ソーン』や『谷間の姫百合』よりも『乳姉妹』に酷似している。

【飯塚08-150】【飯塚09-57】【飯塚14-157、158】『一束縁』は『ドラ・ソーン』の翻訳ではなく、『乳姉妹』からの重訳なのか。それとも、ブREMに別の版本『伯爵の娘』があるのか。真相はよくわからない。

【飯塚08-152】【飯塚09-59】【飯塚14-160】『一束縁』の中身が『ドラ・ソーン』よりも『乳姉妹』に近いのはどういう経緯によるものなのか。解明できない謎はまだ多い。

飯塚は同じ問題を複数の書き方で提出する。『ドラ・ソーン』から日訳『谷間の姫百合』『乳姉妹』および漢訳『一束縁』の関係を探っている。だが結論を得ることができない。

「ブREMに別の版本『伯爵の娘』があるのか」と疑問形にする。しかしこれはほぼ正解に到達している。ただ最後の詰めができていない。英文原作のことを言っている。解決できなかった理由は簡単だ。『ドラ・ソーン』から離れられなかったからだ。前稿でも述べたとおり日本近代小説研究の常識に呪縛されている。

結論を得られず3本の論文に同じ文章を使い

まわし謎のままにして放り出す。掌中の解が抜け落ちていったことに気づかない。他人のことながら残念すぎて嘆息なくして読むことができない個所だ。

まとめる。飯塚の理解では次のようになっている。図解すれば『ドラ・ソーン』→『谷間の姫百合』と『乳姉妹』（『ドラ・ソーン』プラス別の種本の可能性あり。また漢訳『一束縁』が酷似する）だ。『一束縁』は『ドラ・ソーン』の翻訳ではないらしいところまで接近している。そこから『乳姉妹』からの重訳だろうかとも疑問を出す。

以上を見れば飯塚が『ドラ・ソーン』の日本語翻訳を中心に置いていることがわかる。そこから中国に影響を及ぼしたと考えると強固だ。漢訳と日訳が固く結びついている。

考えるのだが中国には中国独自の動きがあってもいいのではないか。そうであってもなんの不都合もないだろう。だが日本とは無関係に外国作品を漢訳したとは思わなかった。飯塚はどうしても相互に影響関係があることにしたいらしい（後述）。理由は不明だ。

『ドラ・ソーン』を出発点にしたままでは『乳姉妹』も『一束縁』も原作問題を解決できない。すでに明らかにされている。『ドラ・ソーン』はそれらの原作ではないからだ。

それにしても飯塚論文はほかの研究者に与える影響が大きい。誤った影響だから気分が沈む。

飯塚ら日本の研究から強く感化された複数論文を紹介する。既出だから部分的に省略して最小の重複部分に抑えたい。

[宏淑12-5]在《乳姉妹》出版之前，日本已有一個旧訳本《谷間の姫百合》，訳者為末松謙澄。

『乳姉妹』が出版される前に日本ではすでに旧訳本の『谷間の姫百合』があり訳者は末松謙澄である。

『乳姉妹』と『谷間の姫百合』は同じ原作によっているという考えだ。定説を従来通りになぞった。

次の潘少瑜は視野を広めて別の漢訳に言及する。

[少瑜12-14]這一系列的翻譯改寫作品，以伯莎・克雷的《朶拉・索恩》為源頭，……先有末松謙澄（1855-1920）在1888年翻譯的《谷間の姫百合》，接著有1903年菊池幽芳翻案的《乳姉妹》。《乳姉妹》传入中国之後，則產生了……中訳本《一束縁》（1905 [6]）、²⁹陳梅卿訳写的《紅涙影》（1909），以及劉韻琴（1884-1945）將菊池幽芳《乳姉妹》中訳的《乳姉妹》（1916）。

この同系列の翻訳と書き換え作品はバーサ・[M・]クレイの『ドラ・ソーン』を源にして……まず末松謙澄が1888年に『谷間の姫百合』に翻訳し、つづく1903年に菊池幽芳翻案の『乳姉妹』である。『乳姉妹』は中国に伝わると……漢訳『一束縁』（1905 [6]）²⁹、陳梅卿訳『紅涙影』（1909）および劉韻琴（1884-1945）が菊池幽芳の『乳姉妹』を漢訳して『乳姉妹』（1916）になった。

²⁹但根據情節判斷，此書（注：『一束縁』）應該是菊池幽芳《乳姉妹》的訳本。

²⁹筋立てから判断して該書（注：『一束縁』）は菊池幽芳『乳姉妹』の訳本でなければならぬ。

潘少瑜は飯塚とほぼ同意見だ。『ドラ・ソーン』を底本にして『谷間の姫百合』と『乳姉妹』ができた。幽芳の『乳姉妹』が漢訳『一束縁』、さらに『紅涙影』と劉韻琴訳『乳姉妹』に変身する。イギリスを出発点にして翻訳は日本、中国へと一直線につながる。幽芳『乳姉妹』の訳本が『一束縁』であると断言している。ここまで力強く断定するのだから十分な根拠と準備が

あると普通は考える。ところがそうではなかった。

[楊鄒18-428、429]……『ドラ・ソーン』の中国語訳は2つある。最初の翻訳は、1902 [6]年に出版された『一束縁』（商務印書館）である。……著作権ページに「丙午年二月初版 原著者 英国李来姆 訳述者 商務印書館編訳所」と記されている。発音から考えれば、李来姆はブレムにあたり、バーサ・M・クレイの本名であるシャーロット・メアリー・ブレムのことだと推定できる。飯塚容の考察によって、「その内容は『ドラ・ソーン』や『谷間の姫百合』よりも『乳姉妹』に酷似している」ということが明らかにされている。（注：『紅涙影』についての言及は別稿にある）

楊文瑜＋鄒波の意見が従来と異なるのは『一束縁』が『ドラ・ソーン』から直接に漢訳されたと主張するところだ。では飯塚の指摘する「『乳姉妹』に酷似している」についてはどう考えるのか。ここで彼らは自らの見解を述べない。別論文において説明がある。

[楊鄒18-439]……原作の『ドラ・ソーン』を大幅に翻案した『乳姉妹』は家庭小説の典型をつくり、大きな反響を呼んだ。『乳姉妹』の成功に影響され、作品は様々な形で視聴者に親しまれた。新派劇や歌舞伎の舞台上に上り、何度も映画化された。

舞台上で上演され映画になったというのは事実だ。しかしその原作は『ドラ・ソーン』ではない。

飯塚が日本と中国を作品で関連づけたがっていることに触れた。それを受け継いだのが楊文瑜＋鄒波だ。

【楊鄒18-440】1910年代から中国上海で新劇が盛んに上演されていた。日本に留学した経験を持つ春柳社は『乳姉妹』から訳述された『一束縁』を選び、それを脚色した『姉妹花』を上演し、『ドラ・ソーン』の演劇化に成功した。次に登場した笑舞台の『乳姉妹』は日本の衣装で演じたもので、日本の新派劇『乳姉妹』の脚本を用いた。演劇『紅涙影』は1914年から1942年ごろまで舞台上で演じられ、『ドラ・ソーン』の数種の小説翻訳の中で土着化したものとして影響力を拡大し、……/日本を経由して中国で翻訳、改作され、受容された『ドラ・ソーン』は近代世界文学の流通を証明する好例である。

日訳本をもとにして中国で演劇化されたのは事実だ。しかしそれを支えた裏の作品関係が正しくない。筆者は読みながら困惑する。

「『乳姉妹』から訳述された『一束縁』」とか「『ドラ・ソーン』の演劇化」あるいは『紅涙影』の原作を『ドラ・ソーン』とするのだ。飯塚説を承認し受け入れている。一見ありそうな事実関係である。著者はそう信じているらしい。その文章を引用するために引き写している筆者のほうが鼻白む。明らかに間違いだからだ。

結局のところ日本経由で中国に受容されたという『ドラ・ソーン』は「近代世界文学の流通を証明する好例」にはならない。

【鄒18-28】『一束縁』は英語の原作『ドラ・ソーン』を翻訳したものというよりも、菊池幽芳の『乳姉妹』から翻案された可能性が高いということになる。

【鄒18-34】中国における小説の翻訳を考察すると、三つの訳本が『ドラ・ソーン』の日本語訳『乳姉妹』と関わっていることが明らかになった。『一束縁』は『乳姉妹』からの翻案作であり、韻琴女士の『乳姉妹』

は菊池幽芳の作品を忠実に訳した作品である。さらに『ドラ・ソーン』をリライトした『紅涙影』は『乳姉妹』の内容を取り入れていた。

漢訳『一束縁』は幽芳『乳姉妹』を翻案したものだ。そう鄒波は考えを固めた。また潘少瑜の意見を受けて陳梅卿訳『紅涙影』に言及した。「『ドラ・ソーン』をリライトした『紅涙影』は『乳姉妹』の内容を取り入れていた」という。ならば『紅涙影』（1909）は『ドラ・ソーン』と幽芳『乳姉妹』（いうまでもなく韻琴女士訳『乳姉妹』1916ではない）の混合物ということになる。

クレイ『ドラ・ソーン』からはじまり日本の『谷間の姫百合』『乳姉妹』をへて中国の『一束縁』『紅涙影』に及ぶことになった。楊文瑜+鄒波は飯塚容らの意見を継承しているから問題は小さくない。

転換点——張治の新発見

『ドラ・ソーン』が日訳されて『谷間の姫百合』になった。これは末松謙澄が認めている。翻訳文を検討しても間違いはない。

問題が解決される順序が重要だ。先に漢訳『一束縁』についての原作問題が提起された。『乳姉妹』ではないことにご注意いただきたい。張治が指摘した。

【張治20】事実上、上述兩位学者也提出，“李来姆”这个名字，很容易想到這可能是清末民初小説訳家們很追崇的那位英倫維多利亞時代的女小説家 Charlotte Mary Brame (1836-1884)，受這個想法影響，我決定逐一搜檢網上能找得到的該作家所有作品，終於發現《一束縁》的原作就是1880年紐約出版的那部 Lord Lisle's Daughter,

事實、上述のふたりの学者（飯塚容と潘少瑜）が「李来姆」という名前を出してい

てこれは清末民初の小説家たちが尊敬してやまないイギリス・ヴィクトリア時代の女性小説家 Charlotte Mary Brane (1836-1884) だろうと簡単に思いついた。この考えにしたがってネット上で探せるだけの彼女の作品を検索してついに『一束縁』の原作が1880年ニューヨークで出版された Lord Lisle's Daughter であることを突き止めた。

漢訳『一束縁』の原作はブレイム『ライル卿の娘』(1880)だという。張治による新発見だ。すばらしい。

『一束縁』の原作を突き止めた。そこまでは間違いない。だが張治が関知しないその次に新しい局面が存在する。

張治の発見は研究を次の段階へ押し進める影の力になった。すなわち別に存在する日本語訳作品の原作を特定する条件が整ったという意味である。筆者の中で『乳姉妹』の原作へと焦点が移行する。

解決されるべき問題は次だ。『一束縁』と関係があるとされる幽芳『乳姉妹』だ。こちらの原作についても必然的に見直しが必要となる。従来どおりの『ドラ・ソーン』原作でいいのか。当たり前疑問が出てくる。

ブレイム原作と『乳姉妹』を比較対照した。すると従来とは異なる新しい事実が出現したのだ。すなわち『乳姉妹』の原作もブレイム『ライル卿の娘』であることを確認した。

『乳姉妹』の原作は『ドラ・ソーン』だと一般に言われ続けていた。皆がそう思い込んでいただけ。具体的な証拠はなかったのだ。菊池幽芳がそうだと声明したことはない。明治の同時代人がまず『ドラ・ソーン』を提出した。同じクレイ作ならばはるか昔に先行する謙澄『谷間の姫百合』の『ドラ・ソーン』に違いない。そう考えてもとが推測なのだった。後の研究者がそれを引き継いで『ドラ・ソーン』だと強く主

張しただけ。証拠は存在しなかった。両者を比較対照して『ドラ・ソーン』に存在しない部分は幽芳の創作だと頭から決めてかかった。誤りである。

『一束縁』は『ドラ・ソーン』とは関係がない。同時に『乳姉妹』からも『ドラ・ソーン』説が離れる。もともと関係がないので離れるという表現も妙だ。しかし従来からつながっているといっていた。だから印象としてはやはり離れる。

『一束縁』と『乳姉妹』は影響関係で結ばれている。これが以前の常識だ。研究論文から再度引用して確認しておく。

[飯塚08-150][飯塚09-57][飯塚14-157、158]『一束縁』は『ドラ・ソーン』の翻訳ではなく、『乳姉妹』からの重訳なのか。[少瑜12-14]筋立てから判断して該書(『一束縁』)は菊池幽芳『乳姉妹』の訳本でなければならない。

[鄒18-34]中国における小説の翻訳を考察すると、三つの訳本が『ドラ・ソーン』の日本語訳『乳姉妹』と関わっていることが明らかになった。『一束縁』は『乳姉妹』からの翻案作であり

上記の研究者たちのうちひとり疑問を残しながら、ほかは『一束縁』と『乳姉妹』の間に関係があることを断固として主張する。

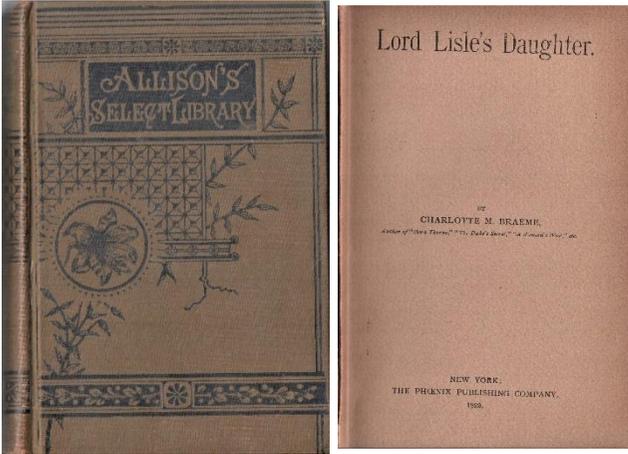
あらたな局面が出現している。ブレイム『ライル卿の娘』が出てきた。それを視野に入れて考える必要がある。すでに『ライル卿の娘』を日訳したのが幽芳『乳姉妹』であることが確定している。次に解決すべきは幽芳『乳姉妹』と漢訳『一束縁』がつながるかどうかの問題だ。ブレイム原作と漢訳『一束縁』の本文検証が必要である。以下において検討する。

ブレイム『ライル卿の娘』と漢訳『一束縁』

ブレイム本文は架蔵の以下を使用する。

CHARLOTTE M. BRAEME. "LORD LISLE'S DAUGHTER." NEW YORK: THE PHOENIX PUBLISHING COMPANY. 1892 (ALLISON'S SELECT LIBRARY)

open library に収録される単行本は刊年不記(1880年と説明される)だ。組版は上の1892年版と同一である。



1892年版

『一束縁』については以下を使用する。

(英) 李来姆著、商務印書館編訳所訳(蘭言主人口訳、老鈍演義)『(道德小説)一束縁』20回、上海・商務印書館、丙午年二月初版/中華民國二年(1913)十二月再版、説部叢書初集第二十九編



此書有著作權翻印必究

原著者	英國李來姆
譯述者	商務印書館編譯所
發行所	上海商務印書館
印刷所	商務印書館
分售處	商務印書館分館

丙午年二月初版
中華民國二年十二月再版
(一束縁一册)
電話號碼九百零九號

前稿においてブレイム『ライル卿の娘』と幽

芳『乳姉妹』の本文を比較対照した。冒頭部分に幽芳による省略、書き換えが多くあることがわかっている。

目訳との比較のために同じ箇所を示す。

AN artist might have sketched Deepdale as the model and type of an English village. It nestled amid the Devonshire hills, trying to hide itself under the spreading shade of tall trees. The bonny Deeplow Woods half inclosed it; smiling corn fields, green meadows, and pleasant gardens gave it a quiet, varied charm. The deep, broad stream, the River Floss, ran by it; far off in the distance lay the chain of blue hills that sloped down to the sea.

英国曠望省。有一個村莊。名叫蝶彈兒。四面都是叢樹圍繞。稻田草地。遠近參錯當中有一道河。從那仏拉司江的分派到此。合流經過。這村邊隱隱約約的一抹青山。斜插海中。

固有名詞を並べる。「Deepdale/蝶彈兒」「Devonshire/曠望省」「the River Floss/仏拉司江」。これらはまったく一致している。冒頭こそ違う。だが英文をおおよそそのまま漢訳しているといえる。幽芳はここを省略した。

They were a simple, kindly race, the people who dwelt in Deepdale—far behind the rest of the world in knowledge. 這莊上的居人。都是忠厚樸實一派。

The weather and the crops were their two chief subjects of conversation and anxiety. Strangers seldom came near the village; the railway had not broken upon its tranquil calm. There were many such quiet, sunny nooks in old England year

ago, but they are rare now.

他們所最關心的事。無非是課晴問雨。同那種植等類。這地方幽僻。外人遊歷不到。離火車站道又遠。屋舍三三五五。自成村落。

The houses were scattered; there was no regular street; a group of cottages stood under the tall poplar-trees; another in the midst of flower gardens; little villas were dotted here and there, half hidden by luxuriant foliage.

也有屋邊倚着一棵梧桐的。也有房屋藏在花園裏。一半露出外面。

村についての風景描写が続く。ポプラと梧桐(アオギリ)は違うように思う。漢訳者はポプラにはなじみがなかったのか小さな改変だろう。逐次訳ではないが幽芳がこれらを省略したのに比較すればよく漢訳している方だ。

Perhaps the most picturesque spot in Deepdale was Meadow Lane, one of those broad green lanes only seen in England; the hedges filled with wild roses and eglantine; hawthorn-trees perfuming the clear, summer air, and wild flowers growing in rich profusion.

這裏最好的地方。叫做草田巷。那巷十分寬闊。兩面路旁種着些矮樹。還夾些雜花。

固有名詞の Meadow Lane は「草田巷」に意識した。wild roses and eglantine; hawthorn-trees などの具体的な植物は「矮樹」「雜花」でまとめた。漢訳に当たっての小さな改変だ。許容範囲内だと考える。以下の波下線は筆者。

A little cottage stood at the end of the lane. Claude Lorraine would have made a grand picture of it. A little cottage, with bright windows encircled by guelder roses

and woodbines; and the white jasmine flowers shone like pale stars. A group of tall chestnut-trees stood near, and a pretty brook ran singing by.

到了夏天。那一種葱鬱之色。令人心地清涼。巷底裏有一所小屋。環窗都種的玫瑰木香。花開時候。香氣襲人。左近有極高的栗樹。又有一道小港。流水的聲音。輕脆可聽。

On this evening, when our story opens, a young lady arrived at Deepdale. She came from some neighboring town, in a shabby, worn-out fly, bringing with her a large box and a little child. The driver, obeying the lady's directions, inquired for Mrs. Rivers, of Rosemary Cottage; and some of the village people, attracted and half dazzled by the fly, shabby as it was, showed the way to the cottage in Meadow Lane. But there were places where the brook widened, and the carriage could not pass. The lady quickly solved the difficulty; she bade the driver go to the village inn, and send the box on to the cottage, and she herself took the child in her arms.

"Tell me," she said, gently, "how long you can wait. Give me as much time as you can."

"I must be back by eleven if possible," he replied.

"Then I will be at the inn by ten," she said, turning from him, and clasping the child in her arms. She walked quickly down the green lane; then she sat down upon the trunk of an old tree and gazed around her.

有一天。將近黃昏。來了一輛破敗馬車。中間坐着一個少婦。懷裏抱着一個嬰孩。馬夫停了車。便問江夫人的住處。從旁有人點他。

現在羅士麦宅裏。那少婦叫馬夫把車子暫停這辺客店裏。約定十点钟回来。自己抱了嬰孩。轉身就走。急急忙忙向那草田巷裏去。到了巷底。就在那横臥着地的大樹上坐了。略一顧盼。

原文波線部分は漢訳していないことを示す(以下同じ)。幽芳が一部分を日訳したのとは異なる。固有名詞は次のとおり。「Mrs. Rivers／江夫人」「Rosemary Cottage／羅士麦宅」と対応する。

The child in the lady's arms stirred, and she bent over it, kissing the little face with a wistful love pitiful to see; then she placed the child down for a few minutes, standing by her side.

那嬰孩也驚醒了。低下頭去。在那嬰孩的額上吮幾吮。露出一種憂愁疼愛的形狀。把嬰孩放了下來。

"This will be my darling's home," she said to herself; "and I could wish for no fairer one."

对着他道。想必這裏。就是你的生路了。像這樣地方。我還不放心麼。

Pensively she gazed upon the Child; then she rose, took up her precious treasure and walked on to the cottage, and gently rapped at the door. It was opened by a clean, kindly looking woman, who cried out with delight when she saw who stood there.

又把他抱了起來。走到那小屋門前。輕輕的叩上兩聲。那門開了。走出來一個一身素淨滿面慈善的婦人。△是個極和平快樂的形狀。就是方才少婦所問的江夫人了。△

△黄色△部分は漢訳で書き加えた個所を示す(以下同じ)。訳者による説明だ。

"I never believed it," she said. "Can it really be you, Miss Margaret? I thought the news too good to be true."

△開口便道。△阿呀。想不到麦加来小姐会来了。。

固有名詞が一致する。「Miss Margaret／麦加来小姐」である。発言者を「道」で示すのは会話を翻訳する記号が一般化する前だからだ。当時の中国では「曰」なども使用して会話文であることを明示する。昔はこれが普通のやり方だった。

"It is quite true, nurse. I could not leave my darling in any care but yours."

△少婦道。△我為了這個孩子来的。除了你。沒有可以寄託的人。

以上を見るだけで十分だと思う。『一束縁』はブレイム『ライル卿の娘』をほぼ忠実に漢訳している。

若いマーガレット (Margaret Arle また Howard) はアーサー (Captain Arthur Wyverne／亜脱兵頭。のちの Lord Lisle) と秘密のうちに結婚した。子供をもうけたがアーサーはインドに赴任し病気になる。マーガレットは夫を見舞いに行くことにした。それに際し一時的に娘デージー (Daisy Howard／黛茜) を乳母に預けに来たというのが冒頭部分だ。まさか自分の乗った船が難破して死ぬとは思ひもしない。

この部分が『ドラ・ソーン』にないのは当然だろう。『ライル卿の娘』という別作品だからだ。幽芳が勝手に作文したわけではない。『一束縁』についても同じことを言うことができる。

乳母はスーザン (Susan Rivers／江素珊) という。Rivers を「江」と漢訳し Susan は音訳して「素珊」になった。ここだけを中国化させたわけではない。その娘は通称がリタ (Rita)

／列徳、本名は Margaret Rivers) だ。デイジーはリタと一緒に姉妹として育てられた(乳姉妹)。後にリタはデイジーの出生の秘密を知った。リタはデイジーに成りすましてライル邸に入り込む。貴族のフィリップ・ライル (Philip Lisle／李飛力) と結婚するところまでこぎつけた。

前稿と同じく中間を省略する。本稿は『一束縁』の原作を確認するのが目的だからだ。

物語の最後あたりの部分を取り上げる。

貴族と結婚するリタの前に昔の恋人ラルフ (Ralph Ashton／頼虚登) が出現した。以前の約束どおりに自分と結婚するよう迫る。ラルフがリタの嘘をあばく証拠として取り出したのは肖像写真だ(彩色した白黒写真あるいは絵画の可能性もある)。

He held toward her a portrait, the pictured face of a little child—a sweet, spiritual face, with tender eyes and sensitive lips; golden curls ran over the little head. Underneath the portrait was written, in a clear, legible hand, somewhat faded:

“The portrait of my dear little Daisy, given to Susan Rivers by her sincere and grateful friend, Margaret.” p.156

頼虚登又拿一張照片說道。你認得這個人麼。列徳看見照像上。是一個黃髮覆額。滿面和氣的女孩。小照下面。是女人筆蹟。写的是麥加來贈江素珊。此即我女黛茜的照像。82 頁

幽芳はここに「明治」を使って日本風書き換えた。漢訳はデイジーの眼と唇を省略しただけでほぼ原文どおりになっていることがわかる。

口訳した蘭言主人について別の翻訳作品を紹介する。小説雑誌に2作品を翻訳掲載して以下のとおり。

- 1 阿倫 (JAMES ALLAN) 著、蘭言訳述「(軍事談) 旅順落難記」『新新小説』7-10 期 光緒 31.3.1-33.4.1(1905.4.5-1907.5.12) (注：原作者は許軍73による)
- 2 (英) 許復古 (FERGUS HUME?) 原著、蘭言口訳、巢人筆述「紫絨冠」2 節 『新新小説』10期 光緒33.4.1(1907.5.12)

いずれも英語原文から口訳している。林訳方式と同じだ。ただし「旅順落難記」には共訳者が書かれていない。訳述とあるから本人だけで翻訳したものだと思う。

漢訳『一束縁』と日訳『乳姉妹』

以上を見れば漢訳『一束縁』と日訳『乳姉妹』の関係は一目瞭然であろう。日中ともに同じブレイム『ライル卿の娘』を底本にしている。ただ翻訳の方向が両者では異なる。

幽芳は原作の内容を日本に移植した。ゆえに名前も場所もすべて日本風書き換える必要があった。一部に省略を交えながら幽芳なりの工夫をしている。すくなくとも全体としてブレイム原作を基本的にふまえる翻訳だといえる。

一方の漢訳『一束縁』はブレイム原作にもとづいてそのまま訳している。だからこそ固有名詞が原文を写した漢訳になった。訳者の蘭言主人が英語を理解したことをあわせ考えれば日本語からの転訳ではない。

また翻訳題名が異なる。

『一束縁』の「束」は手紙を意味する。「1 通の手紙」が原因で真相が明らかになる。真相究明の場面を取り上げて漢訳題名とした。別に誤りではない。ただし漢訳内容の印象からすれば素っ気なく地味で精彩に欠けており少しそぐわない気もする。

『乳姉妹』も原作の内容を要約している。こ

ちらは血縁のない少女が同じ女性に育てられた側面に光を当てた。

結論。漢訳『一束縁』と日訳『乳姉妹』は両者ともに同じブレイム『ライル卿の娘』を原作とする。ただし漢訳と日訳はそれぞれが関係なく独立して成立した。刊行の先行する日訳が後の漢訳の底本として使用された事実はないと考えてよい。

もう少しだけ補足的に説明する。

飯塚が記した次の感想は何度も引用したくなるほどに興味深い。

[飯塚08-150][飯塚09-57][飯塚14-157]ところが『一束縁』を読んでみると、その内容は『ドラ・ソーン』や『谷間の姫百合』よりも『乳姉妹』に酷似している。

[飯塚08-152][飯塚09-59][飯塚14-160]『一束縁』の中身が『ドラ・ソーン』よりも『乳姉妹』に近いのはどういう経緯によるものなのか。解明できない謎はまだ多い。

漢訳『一束縁』と幽芳『乳姉妹』が「酷似している」ことを謎にする。結論として「解明できない謎はまだ多い」と3度もくり返したその理由だ。推量すれば自分が投げかけた謎を解明できる研究者はいないという自信があるのだろう。そうでなければ同じ文章をここまで重ねるはずがない。

これは典型的な実例である。すなわち前提が間違っているとその結果は迷走せざるをえない。興味深いというのはそういうわけだ。

あらためて解説する。『一束縁』と『乳姉妹』が「酷似している」のは当たり前だ。『ライル卿の娘』を共通の原作としているからである。いわれてきた『ドラ・ソーン』とは無関係だ。注意してほしい。『乳姉妹』(1904)をもとにして『一束縁』(1906)が生まれたわけではない。

『ライル卿の娘』冒頭の風景描写は幽芳日訳

には存在しない。それが『一束縁』にはある。そこに『乳姉妹』を絡めると不必要に混乱する。風景について漢訳者が創作したことになるからだ。不自然である。ブレイム原作をそのまま漢訳したから幽芳訳にはない文章になっているにすぎない。

『一束縁』と『乳姉妹』の両者には影響関係などもとから存在しなかった。中国と日本でそれぞれが独立して翻訳されたのが真相だ。原作『ライル卿の娘』を底本にしているから漢訳と日訳は基本的に同一である。ただし漢訳は原作に忠実で幽芳訳は全体を日本に移植した。それが表面的な違いになっただけである。

つぎは『紅涙影』について述べる。こちらも驚くべき結果になる。 罫

以下のように続きます。

第140号 『紅涙影』の原作(誤解の系譜3)

第141号 漢訳『乳姉妹』について(誤解の系譜4完)

【参考文献】

ほぼ発表年順(同一著者のばあいはまとめた。引用していない文献もある)

[飯塚05]飯塚容「文明戯の映画化について」『現代中国文化の軌跡』中央大学出版部2005.3.31 中央大学人文科学研究所研究叢書36

[飯塚08]飯塚容「もうひとつの『姉妹花』——『ドラ・ソーン(谷間の姫百合)』の変容」『中央大学文学部紀要』通号219号2008.2

[飯塚09]飯塚容「もうひとつの『姉妹花』——『ドラ・ソーン(谷間の姫百合)』の変容」飯塚容・瀬戸宏・平林宣和・松浦恆雄編著『文明戯研究の現在——春柳社百年記念国際シンポジウム論文集』東方書店2009.2.27

[飯塚14]飯塚容「第六章 『谷間の姫百合』『乳姉妹』の変容——もう一つの『姉妹花』」『中国の「新劇」と日本——「文明戯」の研究』中央大学出版部2014.8.1。注：2009年論文に潘少瑜論文などを加筆したもの。

- [宏淑12]陳宏淑「明治与晚清翻譯小説の訳者意識：以菊池幽芳与包天笑為例」『中国文哲研究通訊』第22卷第1期 中国翻譯史專輯(上) 2012.3 電字版/ファイル名：85-3-20.pdf
- [少瑜12]潘少瑜「維多利亞《紅樓夢》：晚清翻譯小説《紅淚影》的文学系譜与文化訳写」『台大中文学報』第39期 2012.12 電字版
- [Law12]Graham Law, Gregory Drozd, Debby McNally, *Charlotte M. Brontë (1836-1884). Victorian Fiction Research Guide 36[Version 1.1 (May 2012)]*
- [楊鄒18]楊文瑜、鄒波「中国における『ドラ・ソーン』の受容——演劇・メディアを中心に」『東アジア日本語教育・日本文化研究』第21輯、福岡：東アジア日本語教育・日本文化研究学会 2018.3.31
- [鄒18]鄒波「東アジアにおける『ドラ・ソーン』の訳訳と翻案——小説の訳訳を中心に」香港日本語研究会『日本学刊』第21号 2018.8 電字版
- [張治20]張治「評《<説部叢書>叙録》：電子書截成就的文献学創新」『上海書評』『澎湃新聞』2020.1.16 電字版

★ ★

- 沈 慶会○『包天笑及其小説研究』華東師範大学 2006 届研究生博士学位論文 2006.4
- KEN K. ITO, ○AN AGE OF MELODRAMA: FAMILY, GENDER, AND SOCIAL HEIRARCHY IN THE TURN-OF-THE-CENTURY JAPANESE NOVEL CALIFORNIA: STANFORD UNIVERSITY PRESS, 2008
- 李 偉昉○接受与流变化：莎士比亚在近現代中国『中国社会科学』2011年第5期
- Graham Law, Gregory Drozd, Debby McNally○*Charlotte M. Brontë (1836-1884). Victorian Fiction Research Guide 36[Version 1.1 (May 2012)]*
- 汪 兆騫○『走出晚清：大師們的涅槃時代』北京・現代出版社2017.6/2019.6第2次印刷
- 崔 文東○《意大利建国三傑伝》化用明治二本政治小説考 『東亞觀念史集刊』第13期2017.12.1

谈谈林译小说口译者毛文钟

王 玉 梁 艳

近日，笔者在《苏州民国艺文志》一书上看到林纾小说口译者毛文钟的简介，“毛文钟（1891-?），江苏吴县（今苏州）人。1910年清华学校毕业留学美国华盛顿大学”^{*1}。这个简介有点简单，而且部分内容不准确。因此，笔者觉得有必要根据已掌握的资料，专门写篇文章介绍一下毛文钟的生平经历。

一、留学生毛文钟

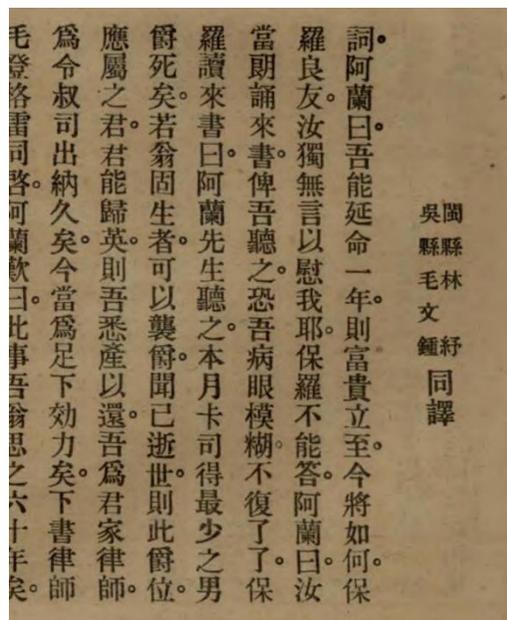


图1 《想夫怜》刊影

关于毛文钟的资料，比较零星。以在《小说月报》上连载的长篇小说《想夫怜》为例，署名方式为“闽县林纾 吴县毛文钟同译”，由此可知他确是吴县（今江苏省苏州市）人。

42	胡宜明	一九	福建龙溪	约翰书院	八一又十分之十七	卫生
43	胡宪生	二〇	江苏无锡	译学馆	六一又四十分之十九	森林
44	郭守纯	二〇	广东潮阳	约翰书院	六一又四十分之一	农
45	毛文钟	一九	江苏吴县	直隶高等工业	六十又十分之九	铁道运输
46	霍炎昌	二〇	广东南海	岭南学堂	六十又十分之九	化工
47	陈福习	一八	福建闽侯	福建高等	六十又二十分之十三	机械
48	殷源之	一九	安徽合肥	江南高等	六十又二分之一	机械

图2 《第二次庚子赔款留美学生名单》

笔者找到一份《第二次庚子赔款留美学生名单》，这是目前关于毛文钟早年经历最可靠的资料。宣统二年七月（1910年8月），毛文钟参加了留美考试，考试成绩（平均）为六十又十分之九，名列第45，留学学科是“铁道运输”^{*2}。名单还显示，毛文钟时年19岁，肄业或毕业学堂是直隶高等工业。这说明，毛文钟确实出生于1891年。

《苏州民国艺文志》上的生平简介，问题出在毛文钟的教育经历上。首先，庚子赔款留美虽然与清华学校息息相关，但并不代表毛文钟毕业于清华学校。《第二次庚子赔款留美学生名单》清楚地显示，他肄业或毕业于直隶高等工业学堂。该校创办于清光绪二十九年（1903年），初建于天津，由周学熙掌校事^{*3}。其次，留学美国华盛顿大学亦存疑，据《中国翻译家研究》转引维基百科资料，毛文钟1915年在密歇根大学获学士学位，1916年在宾夕法尼亚大学获硕士学位，1917年又以特殊学员赴弗吉尼亚大学深造^{*4}。

二、铁路人毛文钟

毛文钟在美国学的是工科。他选择的专业“铁道运输”在当年的中国很热门，据说第二次庚款留美考试初试时，英文试题即为“借外债兴建国内铁路之利弊说”^{*5}，这说明他的理想与“工业救国”的时代思潮比较一致。毛文钟是何时完

成学业回国的，目前不能确定，大概在1918年前后，最迟在与林纾合作之前，即1920年9月前。

毕业回国后，毛文钟一直在铁路系统工作。目前可查的资料显示，1922年10月，毛文钟在沪宁铁路管理局任通译课办事员，他想改派车务处学习员，结果被交通部驳回^{*6}。1923年3月，时任两路总务处秘书助理的毛文钟，被派办交通部驻沪航务专员事宜^{*7}。1933年4月，毛文钟任京沪、沪杭甬铁路局车务人员训练所筹备委员会委员^{*8}；同年11月，毛文钟被派为京沪沪杭甬铁路车务处总务课课长^{*9}。

《申报》有关报道对毛文钟也有涉及。如，1929年6月1日，毛文钟作为总务处代表，参加路局举行的孙中山奉安典礼纪念大会^{*10}；1934年2月，出席两路局购料审查委员会会议^{*11}。此外，毛文钟还担任过北洋政府交通部铁路技术委员会运输股专任委员^{*12}。

三、毛文钟谈林纾

毛文钟是林纾后期最重要的口译者之一。据笔者统计，毛文钟和林纾合译小说多达22部，包括《想夫怜》、《梅孽》和《双雄义死录》等^{*13}。其中，除了未刊稿外，都在1920-1923年间发表或出版。毛文钟如何看待他自己与林纾的合作？鸳鸯蝴蝶派作家秦瘦鸥在《略谈“林译小说”》说起过：

曾与林氏合作译过几部书的吴县毛文钟（观庆）先生有一次和我谈起，林氏自己虽然不懂外文，他的所谓译实际上是采取小学生做作文那样的“听写”方式来写作，但他的态度是相当认真的，稍有怀疑，就要叫口译者从头再讲，有时候甚至要讲上好几遍，他才认为满意。同时，他却又十分固执，中文稿一经写定，口译的人如发现了什么不妥之处，要求他修改，就难如登天，纵然以不符合原书本意为理由，向他力争，他老先生的倔脾气一发，往往也会置之不理。于是“林译小说”中难免留下了一些笑话，例如：罗马大主教的餐桌上，竟出现了“杯箸纷陈”的场面；

伦敦或巴黎的绅士们居然也会“拂袖而去”。这在林氏自己是永远不会觉察的。^{*14}

樽本照雄在《林纾冤案事件簿》中也引用了这段话^{*15}，出处是宁远《小说新话》（香港：上海书局，1972年12月再版）。笔者手边没有这部港版图书，但意识到宁远可能就是秦瘦鸥的笔名。后来查阅了一些资料，果然证实了这个猜想。秦瘦鸥（1908-1993），上海嘉定人，现代作家，宁远是其笔名之一，1949年后曾在香港工作过^{*16}。不过，秦瘦鸥在文中并未交待毛文钟说这段话的年代。

包括毛文钟在内的第二批庚款留美学生，共70名，人才济济，如比较为大众熟知的赵元任、竺可桢和胡适等。其中，胡适留学归国后即掀起了轰轰烈烈的新文化运动，与以林纾为代表的旧派形成了鲜明的对立；而同一批留美的毛文钟，归国后竟然成了林纾重要的助手、口译者，这不能不说是一个有趣的、值得深思的现象。 罍

本文系国家社科基金青年项目“中国近代翻译文学中的日文转译现象研究（1898-1919）”（15CWW007）、国家社科基金重大项目“近代以来中日文学关系研究与文献整理（1870-2000）”（17ZDA277）的阶段性成果。

（作者单位：上海行政学院校刊编辑部；同济大学外国语学院）

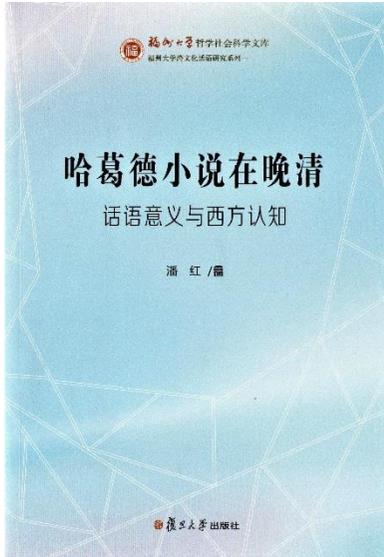
【注】

- 1) 张耘田、陈巍：《苏州民国艺文志》（上），广陵书社，2005年，第84页。
- 2) 陈学恂、田正平：《中国近代教育史资料汇编 留学教育》，上海教育出版社，2007年，第206页。
- 3) 《天津河北文史》（第10辑），政协天津市河北区委员会文史资料书画艺术委员会，1998年，第135页。
- 4) 方梦之、庄智象：《中国翻译家研究 历代卷》，上海外语教育出版社，2017年，第816页。
- 5) 许守祜：《1868-2010中国铁路教育志稿》，西南交通大学出版社，2013年，第171页。
- 6) 《局令》、《部令》，《铁路公报：沪宁沪杭甬线》1922年第80期。
- 7) 《局令》，《铁路公报：沪宁沪杭甬线》1923年第93期。
- 8) 《京沪杭甬铁路日刊》1933年第653期。
- 9) 《部令》，《铁道公报》1933年第705期。
- 10) 《奉安公祭大典》，《申报》1929年6月3日，第13版。
- 11) 《两路举行购料审查会》，《申报》1934年2月7日，第12版。
- 12) 王斌：《北洋交通部铁路技术委员会标准化工作述评》，《工程研究-跨学科视野中的工程》2016年第8期。
- 13) 参考樽本照雄编：《清末民初小说目录》（第12版），清末小说研究会，2020年。
- 14) 秦瘦鸥：《小说纵横谈》，花城出版社，1986年，第175页。
- 15) [日]樽本照雄：《林纾冤案事件簿》，商务印书馆，2018年，第253-254页。
- 16) 陶长坤：《简明现代文学手册》，漓江出版社，1991年，第97-98页。

清末小説から

- 詹 宜穎○虚無党小説の跨境旅行——関關於“Strange Tales of a Nihilist”英、日、中三個版本的考察 『東亜観念史集刊』第13期2017.12.1
- 張 玉○1920年代の中国における黒岩涙香『野の花』の受容——無声映画『空谷蘭』を中心に 『跨境：日本語文学研究』第6号 2018 高麗大学校日本研究センター 電字版
- 文 娟○文学場域変遷中の商務印書館与近代小説——以十集系列“説部叢書”為研究視角 『文藝理論研究』2018年（総第38卷）第2期 2018.3.25
- 孫 艶娜○論文明戲对莎士比亚的文化転訳 『国外文学』2019年第1期（総第153期） 2019.2.25
- 王 桂妹○旧派の沈黙及林纾の境遇：五四新旧文化論戦在1919 『武漢大学学報（哲学社会科学版）』2019年第2期（第72卷第2期）2019.3
- 鄒 小娟○『20世紀初中国小説中の西方形象』北京・中国社会科学出版社2019.8
- 黄 麗珍○清末民初翻譯小説底本来源研究 『臨沂大

学学报』第41卷第5期(総第210期) 2019.10
 潘紅○『哈葛德小説在晚清:話語意義与西方認知』
 上海・復旦大学出版社2019.11 福州大学哲
 学社会科学文庫 福州大学跨文化話語研究
 系列一



瀬戸 宏○商務印書館版《吟辺燕語》的文化意義——
 再論林紓の莎士比亚觀 『中国出版史研究』
 2019年第4期 2019.12
 梁 蒼泱○中西認知的“誤會”与觀念的碰撞——論英
 人傅蘭雅的晚清時新小説徵文 『中国現代
 文学研究叢刊』2020年第1期(総第246期)
 2020.1.15
 宋 雪○“語怪小説”中的政治寓言——梁啓超訳《俄
 皇宮中之人鬼》の意義 『中国現代文学研究
 叢刊』2020年第1期(総第246期) 2020.1.15
 董 亜恵○人物類型、叙事邏輯与功能在中国近代小説
 推演——《九命奇冤》到《霍桑探案》 『中
 国現代文学研究叢刊』2020年第1期(総第
 246期) 2020.1.15
 晋 海学○民初政治小説《極楽地》の文学史意義
 『中国現代文学研究叢刊』2020年第1期(総
 第246期) 2020.1.15
 徐 蒙○『中華書局雜誌出版与近代中国(1912-
 1937)』台湾・元華文創股份有限公司2020.2
 安 憶萱○《巴黎茶花女遺事》与林紓的情愛觀 『中
 国現代文学研究叢刊』2020年第3期(総第
 248期) 2020.3.15

范海遐、何建敏○符際翻譯視角下林紓訳作《伊索寓言》
 中的插图訳文賞析 『惠州学院学报』2020
 年(総第40卷)第2期 2020.4
 江中柱、閔定慶、李小荣、湯江浩、于英麗編○『林紓
 集』全10冊 福州・福建人民出版社2020.4
 許高勇、張雯娟○民国初期商務印書館、中華書局報刊
 的知識伝播与知識青年的閲読 『中国出版史
 研究』2020年第2期(総20期) 2020.4.20
 柳 和城○回眸:商務印書館的日用書出版——從《日
 用須知》到《日用百科全書》 『新聞出版
 博物館』2020年第1期(総第36期) 2020.5
 姜 荣剛○“小説改良会”縁起及相關活動考論——兼
 論中外互動与晚清“小説界革命”的發生与
 演变 『中国現代文学研究叢刊』2020年第5
 期(総第250期) 2020.5.15
 房 棟○清末民初的遊戲文章与“五四”新文学の語
 言可能性 『中国現代文学研究叢刊』2020
 年第6期(総第251期) 2020.6.15
 羅 昕○“林紓訳小説”問世121年,《林訳小説精
 選十種》再現經典 ウェブサイト『澎湃新
 聞』2020.6.22 電字版
 金 明編○『中華翻譯家代表性訳文庫・林紓卷』杭
 州・浙江大学出版社2020.3
 金 明編○林紓訳事年表 『中華翻譯家代表性訳文
 庫・林紓卷』杭州・浙江大学出版社2020.3

